

# 正史を彷徨う

## Part IV

森隆一



(Wiki「日本書紀」より)

## Part IV への序 (Part I の復習)

本 Part では、北九州移住後の倭を考えてみる。まずは、Part I で作成した倭の移住に関する作業仮説を、時系列的に並べてみる。

作業仮説 I4: 倭国は部族連合国家であった。

作業仮説 I10: 神功皇后四十年は魏の正始元年で、西暦は 240 年である。元年は 201 年となる。

作業仮説 I06: 後漢から魏にかけて、朝鮮半島南部の国は、馬韓・辰韓・倭であった。倭の移住後、その構成部族の残った国で、国となったものが任那や加羅であった。また、邪馬台国は加羅にあった。

作業仮説 I13: 倭の移住は正始八年 247 から泰始初年 276 の間に行なわれた。

作業仮説 I11: 卑弥呼と壹与の事跡が神功皇后紀となり、神格的部分と九州への移住が天照大御神となった。

作業仮説 I9: 「三国魏の終わり頃(3世紀後半)には、女王の都(すなわち、邪馬台国)は菊池川・大野川辺りにあった。その後、豊国が九州の最後の拠点となった。

作業仮説 I12: 応神天皇廿五年は百済の腆支王十六年で、420 年である。元年は 396 年となる。

作業仮説 I14: 倭の五王の時代に倭の東遷が行われた。

上記考察に到ったきっかけは、後漢書と三国志共に韓条に書かれている、韓は倭と南で接するという記事である。これと、韓は帯方郡(楽浪郡)の南であることと併せると、倭は朝鮮半島にあったことになる。一方、三国志倭人条に書かれている女王国は日本列島にあり、女王国は倭と考えるのが自然である。これから、倭、少なくとも都の邪馬台国、は移動したことになる。

作業仮説とはしなかったが、次のことも考えた。

\* 加上説を考慮すれば、崇神天皇と神功皇后の間の記事は、神功皇后以後のことである。

\* 一人、あるいは、複数の倭王の記事が神武紀・崇神紀・応神紀に振り分けられている。

後漢書は倭条、三国志と晋書は倭人条、宋書と南齊書は倭国条、梁書は倭条、隋書と南史は倭国条、旧唐書は倭国条と日本国条、新唐書

は日本条である。古くは国が付かないが、南北朝以後は国が付くことが多い。これは、中国の王朝がコントロールできない国の存在により、外夷に対する概念の変化によるものかもしれない。

謎の四世紀、あるいは、謎の五世紀という言い方がある。前者は晋書の時代、後者は宋書の時代にほぼ対応する。

本稿の立場からは、隋書東夷列伝の朝貢と裴世清派遣の記事と日本書紀の記事は内容も伴って対応している初めての記事である。この意味では、六世紀も謎の世紀である。隋は 581 年から 619 年まである。雄略天皇六年 461 の記事 吳國遣使貢獻 には宋書の倭王興の記事が対応していると思ってきた。吳国は三国志の国であるが、南朝の王朝も吳とよんでいたと解釈したが、仁徳天皇紀五十八年に吳國 高麗國並朝貢という記事があり、吳国という言葉に関しては検討することが必要となる。

4 世紀・5 世紀に関しては、正史と対応の付く三国史記の記事との対応を考えていくことが不可欠と考えているが、とりあえずは、日本書紀を見ていくことにする。

## 9. 倭の東遷 I (晋書の時代・九州支配・崇神紀-神功紀)

### 序

移住後にまず行うことは、根拠地の確保とその周辺地域の征服である。

三国志倭人条から、移住後早い時期に北九州の玄界灘沿岸は支配下にあったと考える。この根拠地は伊都国としてよいであろう。糸島市が伊都国の跡と言われている。邪馬台国に次ぐ人口を有する投馬国は伊都国をしのぐ根拠地であったと考える。玄界灘沿岸部の次は、北九州の内陸部と周防灘沿岸の征服である。これが女王の時代に為され、女王国への行程表はこの時代の状況を描いたものと考えている。この次は、本州、四国と中九州(熊本と大分の北部地域)の3方向が考えられる。三国志が書かれた279年辺りがこの時期で、中九州の菊池川・大野川流域か、その北の福岡県南部辺りを征服中と考えている。

3.4 節で述べた加上説からは、上記征服は崇神天皇紀から神功皇后紀にかけて書かれていることになる。時期的には3世紀後半から4

世紀の 150 年弱である。この間の天皇の順番が逆になっているとすれば、皇統は

神功皇后            卑弥呼・台与・壹与            天照大神

仲哀天皇

成務天皇

(日本武尊)

景行天皇

垂仁天皇

崇神天皇            = 応神天皇 = 神武天皇

となる。

まずは、倭王の上奏文にある任那・加羅を見た後。上記イメージを念頭において、各天皇紀を見ていくことにする。

はじめに、日本書紀について考えてみる。書かれているものは、一般的に言えば、漢文である。大半は、(唐以前の)古代中国語と考える。

筆者の現状では、日本書紀を全て読むことは出来ないのと、本稿のレベルではそこまでは必要としない。また、日本書紀の記年と記事はそのまま用いることはできない。しかし、地勢に関する記事は 400 年頃から 700 年ころまでの状況を伝えているのではないかと考える。

今までと同じように、記事に優先度を設けて、見ていくことにする。  
優先順位を順に挙げておく。

**中国の王朝との記事：** 呉国は南朝の王朝をさしていると思われるが、  
検討を要する。

**三国との記事：** 日本書紀で三韓の記事は見た記憶が無い。また、三韓  
の存続した時期は日本書紀の信頼のおける時期ではない。

**固有名詞を含む記事：** 大まかなところでは、官名は、固有名詞かどう  
かわからないが、含めることにする。人名は、有名な人を除いて、対  
象外とする。地名は人名よりは広く扱う。

漢字、特に名詞、の読みについては、音読みと訓読みがある。これ  
らについて、Wikipediaから引用する。

Wiki「音読み」からは、**呉音・漢音・唐音・朝鮮漢字音**があると書  
かれている。

このうち、前3つについては、

**音読みには呉音・漢音・唐音(宋音・唐宋音)・慣用音**などがあり、

それぞれが同じ漢字をちがったように発音する。たとえば、明という漢字を呉音ではミョウと、漢音ではメイと、唐音ではミンと読む。

#### Wiki「呉音」

呉音とは、日本漢字音の一つ。遣唐使などが当時の長安付近の発音（漢音）を学び持ち帰る以前にすでに日本に定着していた漢字音をいう。漢音同様、中国語の中古音の特徴を伝えている。一般に、呉音は仏教用語をはじめ歴史の古い言葉に使われる。慣用的に呉音ばかり使う字（未ミ、領リョウ等）、漢音ばかり使う字（健ケン、軽ケイ等）も少なくないが、基本的には両者は使用される熟語により使い分け等の方法により混用されている。

いつから導入されたものかは明確ではない。雑多なものを含むため、様々な経路での導入が想定される。仏教用語などの呉音は百済経由で伝わったとされるものがあり、対馬音や百済音といった別名に表れている。呉音は仏教用語や律令用語でよく使われ、漢音導入後も駆逐されず、現在にいたるまで漢音と併用して使われている。古事記の万葉仮名には呉音が使われている。

#### Wiki「漢音」



7, 8 世紀、奈良時代後期から平安時代の初めごろまでに、遣隋使・遣唐使や留学僧などにより伝えられた音をいう。中国語の中古音のうち、唐中葉頃の長安地方の音韻体系(秦音)を多く反映している。他の呉音や唐音に比べて最も体系性を備えている。また唐末に渡航した僧侶たちが持ち帰った漢字音は中国語の近世音的な特徴を多く伝えており、通常の漢音に対して新漢音と呼ばれることがある。

持統天皇は、唐から続守言を音博士として招き、漢音普及に努めた。また、桓武天皇は延暦 11 年(792 年)、漢音奨励の勅を出し、大学寮で儒学をまなぶ学生には漢音の学習が義務づけられ、また仏教においても僧侶の試験に際して音博士が経典読誦の一句半偈を精査することが行われ、また漢音を学ばぬ僧には中国への渡航が許されなかった。

江戸時代には漢字を仮名で書き写す字音仮名遣の研究が始まった。その際には呉音よりも体系的な字音資料をもつ漢音を基礎として進められた。字書や韻書をもとに漢音がほぼすべての漢字について記述されるようになり、漢音で読まれない漢字はほとんどなくなった。こうして日本語音としての漢音を発音することが可能となり、明治時代、西洋の科学・思想を導入する際の訳語(和製漢語)に使われたことで広く普及することになった。

Wiki「唐音」

唐音は、日本漢字音において平安時代中期以降、江戸時代末期までに中国から入ってきた字音にもとづくものをいう。宋以降の字音である。唐音の唐は、漢音・呉音と同様に、王朝名を表す(唐朝)のではなく、中国を表す語(唐土)である。

学術的には中世唐音(これを宋音と呼ぶ人もいる)と近世唐音に分けられる。中世唐音は鎌倉時代の臨濟宗・曹洞宗で仏典読誦などに用いられた音。近世唐音は江戸時代の黄檗宗や曹洞宗祇園寺派で仏典読誦などに用いた音、および長崎通事や漢学者が学んだ音。

言海の採収語中、漢語は 13546 語あるのに対し、唐音語とされるものは 96 語しかなく、日本語にはいった語彙数はきわめて小さい。現代人になじみのある唐音語はおおむね中世唐音による。しかし、日常語においてどれが唐音であるかの判定には困難な点が多く、漢字表記が複数あったり、単なる当て字や、呉音・漢音系字音との混種語である可能性のあるものなど、しばしば不確かである。

朝鮮漢字音という用語は今回初めて知った。

Wiki「朝鮮漢字音」

朝鮮漢字音は朝鮮語における漢字の音のことである。朝鮮字音ともいう。中国語における漢字の音に由来するもので、日本語の音読みに対応する。朝鮮漢字音は原則的に1つの漢字に対して音は1つである。

朝鮮半島は中国と陸続きであるため、朝鮮には早い時期から間断なく漢字がもたらされてきたと推測する。しかしながら、訓民正音創製(1443年)以前の古代朝鮮語については、表音文字による朝鮮語の表記がなかったため、漢字音がどのような様相であったのかを知るのが困難である。そのような中で古代朝鮮語の漢字音推測の手がかりとなるのが郷札、口訣、吏読などの借字表記における音読字の読み方である。

古代において、朝鮮語があったのか。すなわち、高句麗と三韓・百濟・新羅が同じ言語であったのかは疑問である。朝鮮半島に倭があったとき、韓と倭の言語はどうであったか。例えば、三国志の辰韓条には、其言語不與馬韓同と書かれている。朝鮮半島に感じをもたらされたのは、漢四郡や帯方郡が設置され、郡の高官は中国から派遣されたことによると考える。

Wiki「訓読み」から一部を引用する。

訓読みとは、日本語において、個々の漢字をその意味に相当する和語(大和言葉、日本語の固有語)によって読む読み方が定着したもの。

古事記などでは万葉仮名で古訓による訓注がつけられているが、その訓は一つの漢字に対して複数存在し固定的ではなかった。平安時代末期(12世紀)に成立した漢和字典類聚名義抄では1字に30以上の訓があるものがみられる。これは、漢字が本来、中国語、つまり外国語を表記するための文字であり、日本語の語義と一つ一つが一致しないためである。このような状況のなか、時を戻して平安時代中期以降になると、漢文を日本語の語順や訓で読む漢文訓読の方法が発達するとともに、一義一訓の形に次第に訓が限定されていき、室町時代には訓がかなり固定化された。

Wiki「万葉仮名」

楷書ないし行書で表現された漢字の一字一字を、その字義にかかわらずに日本語の一音節の表記のために用いるというのが万葉仮名の最大の特徴である。万葉集を一種の頂点とするのでこう呼ばれる。古事記や日本書紀の歌謡や訓注などの表記も万葉集と同様である。古事記には呉音が、日本書紀には漢音が反映されている。江戸時代の

和学者・春登上人は万葉用字格(1818年)の中で、万葉仮名を五十音順に整理し正音・略音・正訓・義訓・略訓・約訓・借訓・戯書に分類した。万葉仮名の字体をその字源によって分類すると記紀・万葉を通じてその数は973に達する。

訓読みについて、訓読みが可能なものは新しい、と考えている。もうすこし、訓読みについて調べた後で、作業仮説にする予定である。

作業仮説の為の問題点としては、訓読みがいつできたかはっきりしていないことと、音読みと訓読みの判断ができるかが挙げられる。

万葉仮名の研究の成果から何か得られるのかもしれないと思って、万葉集のテキストを探してみても、

「Manyoshu -- Japanese Text Initiative」

<http://jti.lib.virginia.edu/japanese/manyoshu/AnoMany.html>

「万葉仮名で読む万葉集」

<http://hgonzaemon.gl.xrea.com/manyoushuu.txt>

が見つかった。

これらを眺めた感想は、音読み・訓読みについて考えるには相当な基礎知識が必要ということである。

中国の正史の倭条に現れる地名・人名などの固有名詞を表にしてみれば、何かが得られるかもしれないと思っているが、これも簡単にはいかない気がしている。

現在、簡単に出来るのは、「繁体字・日本語のピンイン変換」

<https://dokochina.com/traditional.php>

で、現代中国語(北京語)のピンインを調べる程度である。現代で読み方が異なっていれば、古代でも異なっていた可能性が高いと考えられる。

なお、最近気が付いたことであるが、ここでピンインをクリックすればその音声を聞くことが出来る。地名や官名に何か言えないかと考え、大夫：dà fū、大率：dà lǜ、達率：dá lǜ や 濊：wèi、倭：wō、委：wěi などを調べた。

## 9.1. 任那と加羅

倭王珍が

使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王  
を求めたが、安東將軍倭國王に叙された。その後、倭王濟は

使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍倭國王  
に叙されたという宋書の記事に基づいて、作業仮説 I06（二韓＋倭  
説）を想いついた。

以降の王も珍の求めた爵位を要求し続けていて、最終的には武に  
征東大將軍が与えられ、求めた爵位＋ $\alpha$ を得ることができた。これで  
良としたのか、爵位を得る必要性が無くなったのか、あるいは、中国  
の状況からか、この後は、隋の開皇二十年 600 まで朝貢が無い。恐ら  
く、近畿地方への東遷が終り、朝鮮半島における権益を維持するより  
も、東国に主力を注ぐ方を選んだ結果と思われる。

倭王の要求に対して、任那は要求し認められ、加羅は要求していな  
かったが、百濟の代わりに容れられということである。これは、百濟  
も宋に朝貢していたため、宋は認めることが出来なかったから、替わ  
りに、加羅をリスト・アップしたという注釈を何処かで読んだ記憶が

ある。

ここで、1つ疑問が生じる。それは、倭(王珍)は加羅を要望しなかったのは何故かということである。438年頃から502年に征東大將軍に叙せられるまで、60年間に10回ほどの朝貢のたびに求めていたことからから見れば、必要ならば要望に加えていたはずである。含まれていなかったということは、加羅は要望の必要がなかった、すなわち、加羅は支配下、あるいは、影響下にあったということではないかと考える。また、任那が要求に入っていたことは、任那はそうでなかったということになる。朝鮮半島において、倭が強大な時は倭連合の一員となるが、そうでないときは独立に動いたということが考えられる。

## 任那

Wiki「任那」では

朝鮮史学者の田中俊明は、朝鮮・中国の史料では任那を加羅諸国の汎称として用いることはなく金官国を指すものと結論した。朝鮮史学者の権珠賢は日本、朝鮮、中国の金石文を含む23種類の史料における任那と加羅の全用例を精査し、任那は特定の小国の呼称ではな



く、百済にも新羅にも属さなかった諸小国の総称であること、任那の範囲と加羅の範囲は一致しないこと、任那という呼称は倭国と高句麗による他称であると主張している。日本史学者の吉田孝は、日本書紀の任那の用法は、ヤマトが大和国を指すと同時に倭国全体を指すのと同様に、任那加羅(金官国)を指すと同時に任那加羅を中心とする政治的領域の全体を指したものであると主張している。日本史学者の森公章によると、現在(2015年)は任那は百済や新羅のような領域全般ではなく、領域内の小国金官国を指す場合が多く、それらの複数の小国で構成される領域全般が加耶と称すという学説が有力視されているという。

なお、三国史記では任那を見いだしてはいないが、日本書紀には任那の記事は多い。特に、継体天皇紀・欽明天皇紀・推古天皇紀には多くの記事が書かれている。この中で任那の位置に関しては、次の記事が唯一である。

**崇神天皇六十五年 任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也 任那者 去筑紫國二千餘里 北阻海以在鷄林之西南**

任那國は蘇那曷叱知を遣わし朝貢した。任那は筑紫から 2000 里ほどで、北

は海を隔てて新羅の西南にある。

コトバンク「鷄林」のデジタル大辞泉の解説では、

新羅の脱解王が、城の西方の始林に白鷄の鳴くのを聞き、始林を鷄林と改めたという三国史記の故事から、新羅の異称。転じて、朝鮮の異称。

とある。

新羅の西南の海岸の対岸にある島または島に近い半島、釜山からそれほど離れていないということで、地図を眺めていると、巨済島が浮かんでくる。他にも南海島があり、島に近い半島として、麗水市・高興郡がある。

これは、Wiki「任那」とは異なる。倭国の極南界である倭奴国としては、巨済島は有力と考えられる。

倭奴と任那が関連付けられるだろうか。奴→那として、福岡の那の津は奴の津とする考えがあるが、倭と任が結びつくとは思えない。

ピンイン 奴：nú、那：nà、倭：wō、任：rèn、日：rì

一方、新羅本記の脱解王の前文に次、多婆那国は倭の東北 1000 里

の所にあり、ここから流れた卵が金官国を経て辰韓の阿珍浦口に流れ着いた、と書かれていた。辰韓(新羅)と倭国(任那)は東北・西南の位置関係で、二千里ほど離れている。中間(倭国から千里)に多婆那国があり、辰韓との間に金官国がある。ここで、弁韓(弁辰)は現れていない。脱解王の在位期間は、新羅本記では57年から80年、修正王統では162年から185年、再修正王統では244年から267年である。再修正王統の在位期間は、本稿の作業仮説の倭の移住時期と重なってくる。

辰韓の南西に幾つかの国があり、それらの南西に倭があったことになる。三国志では辰韓・弁辰・倭と書かれている。二韓+倭説と倭の移住からは、倭国の大乱後卑弥呼に至るまで、倭(連合王)国に勢力は弱体化した。その後、倭は九州に移住した。倭(連合王)国の構成国では、倭王と共に移住したものと、朝鮮半島に留まったものに分かれた。これらの国の中から脱解王の昔王朝が生まれたと説明できる。

倭(連合王)国の構成国の一つである倭奴国は朝鮮半島の南端にある多島海を支配していて、倭の水軍であった。その多くは倭の移住と共に、日本列島に移ったが、任那国は残った部族の国であったと考える。

さらに、次の記事もある

## 繼體天皇五年 百濟遣使貢調 別表請任那國上□□ 下□□ 娑陀 牟婁四縣

百濟は使いを送り、任那國の上□□・下□□・娑陀・牟婁の四縣を請うた。

## 欽明天皇四年 乃遣施徳高分 召任那執事與日本府執事

施徳の高分を派遣し、任那の執事と日本府の執事をよんだ。

## 欽明天皇廿三年 新羅打任那官家

新羅が任那官家を討ち滅ぼした。

## 推古天皇八年 新羅與任那相攻 天皇欲救任那

新羅と任那が攻めあった。天皇は任那を救うことを望んだ。

執事は初見である。

年記には疑問があるが、時系列順に書かれているとする。

任那国の中に幾つかの縣があったことになる。これらの県は百濟に接していたと思われるが、これは崇神天皇紀での任那とは少し異なる。Wikipedia の大任那であろうか。あるいは、任那が拡大したのか。

繼體天皇の時代は、倭王朝の近畿地方への東遷がほぼ終わった時代と考えている。この時代は、実効性はわからないが、任那は倭王朝

の影響下にあった。その後、新羅は任那を制圧しようとした。推古天皇八年の記事からは、この時の任那は倭王朝の支配下にはなかった。

## 加羅

正史の記事は次の南齊書のみである。

加羅國 三韓種也 建元元年 479 國王荷知使來獻 詔曰 量廣始登 遠夷洽化 加羅王荷知款關海外 奉贄東遐 可授輔國將軍 本國王

加羅国は三韓の出である。建元元年に国王の荷知の使者が來獻した。・・・

建元元年 479 は南齊の建国の年である。この年は倭も朝貢しているが、倭と加羅との関係は書かれていない。恐らく、倭の使いに帯同したのではないか。輔国將軍は倭の高官にも贈られた爵位である。

南齊書の倭の記事は

倭國 在帶方東南大海島中 漢末以來 立女王 土俗已見前史 建元元年 479 進新除使持節 都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事 安東大將軍 倭王武號爲鎮東大將軍

倭国は帯方郡の東南の大海の中の島にある。漢の末より女王を立てた。習俗は前の史書に書かれている。建元元年に、使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王の武を鎮東大將軍に進めた。

この2つが南齊書加羅条・倭条の全てである。

Wiki「伽耶」では、

伽耶は加羅の現代韓国に於ける表記。また加羅諸国は、3世紀から6世紀中頃にかけて朝鮮半島の中南部において、洛東江流域を中心として散在していた小国家群を指す。後述のように、広義の任那に含まれるが狭義の任那とは位置が異なる。414年に高句麗が建立した広開土王碑文にある任那加羅が史料初見とされている。

とあり、同「加羅諸国」では

金官国(駕洛国): 金官国、もしくは駕洛国・金官加羅・任那加羅ともいい、現在の韓国慶尚南道金海市に有ったとされ、その前身は三国志の狗邪韓国であると考えられている。前期伽耶連盟の盟主的な立場にあった。三国遺事巻二に収められている駕洛国記に拠れば、駕洛国の建国神話は卵生神話型のものであり、初代の首露王は金の卵か

ら産まれた為に姓を金と名乗ったという。532年に新羅の圧力に抗しきれず、仇衝王(金仇亥)が国を挙げて降伏している。

大加羅：金官国もまた大加羅(大駕洛)と称されていたように、大加羅の表現そのものは固有名詞ではなく、加羅諸国の中での特に有力なものへの尊称であったと見られている。金官国に代わって台頭してきた伴跋(慶尚北道高靈郡)が、一般的には大加羅を指すものと考えられている。新增東国輿地勝覽に引く釈利貞伝には、高靈郡の背後にある伽倻山の神である正見母主と天神夷毗訶之とから生まれた兄伊珍阿鼓(惱室朱日・内珍朱智)が大加羅の始祖、弟惱室青裔(首露王)が金官国の始祖であるとしており、新興の大加羅がそれまでの盟主であった金官国を越えようとする意識が反映されてできた伝承だと考えられている。

安羅(慶尚南道咸安郡)、古寧(慶尚北道尚州市咸昌)、星山(慶尚北道星州郡)、小加羅(慶尚南道固城郡)などは六伽耶・五伽耶とまとめて呼ばれることがあった。それ以外での小国としては、多羅(慶尚南道陝川郡)、卓淳(慶尚南道昌原市)、己?(全羅北道南原市)、滯沙(慶尚南道河東郡)などが挙げられる。

とある。

三国史記には、伽耶国関係の記年記事もみられる。その内の幾つかを挙げる。

**脱解尼師今二十一年 阿漚 吉門與加耶兵 戰於黄山津口 獲一千餘級 以吉門爲波珍漚 賞功也**

阿漚の吉門と加耶兵が黄山津口で戦い、千人余りを獲た。賞功として、吉門を波珍漚にすすめた。（阿漚は6等で波珍漚は4等）

**婆娑尼師今十五年 加耶賊圍馬頭城**      加耶の賊が馬頭城を囲んだ。

**祇摩尼斯今四年 親征加耶**      加耶に親征した。

**奈解尼師今六年加耶國請和**      加耶國と請和した。

**奈解尼師今十四年浦上八國 謀侵加羅 加羅王子來請救 王命太子于老與伊伐漚利音 將六部兵 往救之 擊殺八國將軍 奪所虜六千人 還之**

浦上八國が謀って加羅を侵した。加羅の王子は来て救援を要請した。王は太子の于老と伊伐漚利音に六部の兵をひきいて救うように命じた。八國の將軍を擊殺し、六千人の捕虜を奪い、帰還した。

**奈解尼師今十七年加耶送 王子爲質**

加耶は王子を人質として送ってきた。



日本書紀でも幾つか見られる。

應神天皇十四年 弓月君自百濟來歸 因以奏之曰 臣領己國之人夫百  
廿縣而歸化 然因新羅人之拒 皆留加羅國

弓月君は百濟から歸化し、次のように奏上した： 臣は己國の百廿縣の民と歸  
化した。しかし、新羅人はこれを拒み、皆は加羅国に留められた。

欽明天皇十三年五月 百濟 加羅 安羅 遣中部徳率木州今敦 河内部  
阿斯比多等 奏曰 高麗與新羅 通和并勢 謀滅臣國與任那 故謹求請  
救兵

百濟・加羅・安羅は中部徳率の木州今敦を遣わしてきた。河内部阿斯比多ら  
が上奏することには： 高麗と新羅はあい謀って我らと任那を滅ぼそうとして  
いる。救援の兵を派遣することを謹んで求めます。

應神天皇十四年は日本書紀の紀年では 283 年、作業仮説 IV12 から  
は 409 年となる、

## 9.2. 崇神天皇紀・垂仁天皇紀

崇神天皇紀と神功皇后紀の間で戦闘の記事が書かれているのは、崇神天皇紀・景行天皇紀（日本武尊）・仲哀天皇紀と神功皇后紀である。ただし、崇神天皇紀は、将軍を派遣したもので、他は親征である。

### 崇神天皇紀

三年 遷都於磯城 是謂瑞籬宮 磯城に遷都した。これを瑞籬宮という。

十年九月 以大彦命遣北陸 武渟川別遣東海 吉備津彦遣西道 丹波道主命遣丹波 因以詔之曰 若有不受教者 乃擧兵伐之 既而共授印綬爲將軍

大彦命を北陸に、武渟川別を東海に、吉備津彦を西道に、丹波道主命を丹波に派遣した。教順しないものがいれば、これを伐つことを命じ、印綬を授け将軍とした。

十月 將軍等共發路 將軍らは任務地に向かった。

十一年四月 四道將軍以平戎夷之状奏焉

四道將軍は戎夷を平定し、これを報告した。

十七年秋七月 詔曰 船者天下之要用也 今海邊之民 由無船以甚苦步  
運 其令諸國俾造船舶

詔した：船は必要なものである。海邊の人々は船が無いから苦勞して徒歩で  
運んでいる。諸国に船を造るように命じた。

冬十月 始造船舶 造船を始めた。

四道將軍の派遣は何らかの威力偵察といえるのではないか。九州  
から派遣したとすれば、北陸は山陰、西道は山陽道、東海は瀬戸内海  
といえるだろうか。また、船の建造は、国営の海運業を行ったとは考  
えられない。まとまって船を造るのは、海を越えて軍を運ぶためと考  
える。では、どんな遠征であろうか。この2つの記事は、東征の準備  
と言えないことはない。

次の記事まで31年間記事は無い。

四十八年 立活目尊爲皇太子 以豐城命令治東國 是上毛野君 下毛野  
君之始祖也

活目尊を皇太子とした。豐城命を東國を治めるように命じた。上毛野君と下  
毛野君の始祖である。

六十年秋 詔群臣曰 武日照命 從天將來神寶 藏于出雲大神宮 是欲見焉 則遣矢田部造遠祖武諸隅而使獻 當是時 出雲臣之遠祖出雲振根主于神寶 . . .

群臣に詔した：武日照命が天より將來した神宝を出雲大神宮に収めた。 . . .

この記事は理解が不十分であるが、当面、用いることはない。

六十五年 任那國遣蘇那曷叱知令朝貢也 任那者 去筑紫國二千餘里 北阻海以在鷄林之西南

この記事は、9.1 節で取り挙げた。

蘇那曷叱知令 の何処までが人名かはわからないが、蘇那は蘇我を連想させる。蘇我氏は任那の王族で、倭王とも対等となり得る部族であったかもしれない。

ぴんいん 蘇: sū、那: nà、我: wǒ、倭: wō

蘇我はカタカナ表記では スーウォ で周防の読みに近い。

4名の将軍を Wiki から補う。

Wiki 「大彦命」

大彦命は、記紀等に伝わる古代日本の皇族。日本書紀では大彦命、古事記では大毘古命と表記される。また稻荷山古墳出土鉄剣の銘文に

見える意富比埜に比定する説がある。阿倍臣(阿倍氏)を始めとする諸氏族の祖。四道將軍の1人で、北陸に派遣されたという。

Wiki「武渟川別」

古事記では、四道將軍としての4人の派遣ではないが、やはり崇神天皇の時に大毘古命(大彦命)は高志道に、建沼河別命は東方十二道に派遣されたとする。日本書紀では阿倍臣遠祖、古事記では阿倍臣等の祖として、いずれも阿倍氏の祖であるとしている。崇神天皇60年7月14日条によると、天皇の命により武渟川別は吉備津彦と共に出雲振根を誅殺している。

Wiki「吉備津彦」

日本書紀(続く記事)派遣に際して武埴安彦命とその妻の吾田媛の謀反が起こったため、五十狭芹彦命(吉備津彦命)が吾田媛を、大彦命と彦国葺が武埴安彦命を討った。

古事記では日本書紀と異なり、孝霊天皇の時に弟の若日子建吉備津彦命(稚武彦命)とともに派遣されたとし、針間(播磨)の氷河之前(比定地未詳)に忌瓮(いわいべ)をすえ、針間を道の口として吉備国平定を果たしたという。崇神天皇段では派遣の説話はない。

Wiki「丹波道主命」

古事記開化天皇段では、父は日子坐王(彦坐王)、母は天之御影神の

女の息長水依比売娘であるという。また同母弟妹として、水之穂真若王(近淡海安直の祖)、神大根王(八瓜入日子王：三野国の本巢国造で、長幡部連の祖)、水穂五百依比売、御井津比売の記載が見える。うち神大根王は、先代旧事本紀では三野前国造の祖であるという。

四道という概念は日本書紀編纂時のものではないかと思っている。中・北九州平定後では、多方面作戦が可能となったということは考えられる。

戦闘を伴う記事は、武渟川別は吉備津彦と共に出雲振根を誅殺している記事と吉備国平定の記事である。

先祖が書かれているのは、阿倍臣、長幡部連(本巢国造)、近淡海安直らである。

Wiki「阿倍氏」

阿倍氏は、孝元天皇の皇子大彦命を祖先とする皇別氏族である。飛鳥時代から奈良時代に大臣級の高官を輩出する。平安時代以後は安倍と称する。

歴史上はっきりとした段階で活躍するのは宣化天皇の大夫(議政官)であった大麻呂(火麻呂とする説もある)が初見である。大麻呂は

大伴金村・物部麿鹿火・蘇我稻目に次ぐ地位の重臣であったと言われている。推古天皇の時代には蘇我馬子の側近として麻呂が登場している。

大化の改新の新政権で左大臣となったのは、阿倍倉梯麻呂(内麻呂とも)であった。阿倍氏には日本書紀などでも外国への使者などに派遣される人物が多く、倉梯麻呂は家柄のみならずそれなりの見識を買われて新政権に参加した可能性が高い。また、倉梯麻呂の娘・小足媛は孝徳天皇の妃となって有間皇子を生んだとされており、またもう一人の娘・橘媛は天智天皇の妃になるなど、当時の阿倍氏の勢力が窺える。

六十八年 崩 時年百廿歳      120歳で崩じた。

53歳で即位したことになる。

任那が正史に現れるのは倭の五王の上奏文である。崇神天皇紀に任那が書かれていることは、五王時代の記事をもってきたとは考えられないか。

## 垂仁天皇紀

二年 更都於纏向 是謂珠城宮也

纏向に更都した。これを珠城宮という。

是歲 任那人蘇那曷叱智請之 欲歸于國 蓋先皇之世來朝未還歟 故  
敦賞蘇那曷叱智 仍齎赤絹一百疋 賜任那王 然新羅人遮之於道而奪  
焉 其二國之怨 始起於是時也

任那人の蘇那曷叱智が帰属することを望んだ。・・・新羅人は道を遮り奪った。2国の怨みはこの時に始まる。

崇神天皇六十五にも派遣された任那国の使者の蘇那曷叱知であろう。4年滞在したことになる。何をしていたのか。また、任那での立ち位置は何であろうか。

一云御間城天皇之世 額有角人 乘一船泊于越國笥飯浦 故號其處曰  
角鹿也 問之曰 何國人也 對曰 意富加羅國王之子 名都怒我阿羅斯  
等 亦名曰于斯岐阿利叱智于岐 傳聞日本國有聖皇 以歸化之

一云：崇神天皇の時代に額有角人の乗った船が越の國の笥飯浦に泊った。・・・意富加羅國の王の子で都怒我阿羅斯という。またの名は于斯岐阿利叱



智于岐という。日本國には聖王がいると聞き、帰属したいといった。

額有角人とは？ 何故崇神天皇紀に書かないのか。角鹿は敦賀というのが定説のようである。

敦賀に着いたのは漂着したのか。そうは書かれていないので、漂着でないことも考えられる。新羅からは、関門海峡が見つからなければ、若狭湾辺りに着くのもコースとしては考えられる。意富加羅国とは？

日本国が正史に現れるのは唐書からである。

上に続き

到于穴門時 其國有人 名伊都都比古 謂臣曰 吾則是國王也 除吾復無二王 故勿往他處 然 臣究見其爲人 必知非王也 既更還之 不知道路留連嶋浦 自北海廻之 經出雲國至於此間也 是時遇天皇崩 便留之

穴門に着いたとき、その国に伊都都比古という人がいて、・・・(この後は訳せない)

Goo 辞書「穴門（あなと） の意味」では

「関門海峡の古称。また、長門国の古称。「穴（な）が門（と）」と読

んだという説もある。」

と書かれている。穴門を長門とすれば、角鹿＝敦賀は少し遠い気がする。仲哀天皇紀で、角鹿と穴門が現れる。

一云 初都怒我阿羅斯等・・・對曰 向東方 則尋追求 遂遠浮海以入日本國 所求童女者 詣于難波爲比賣語曾社神 且至豐國國前郡 復爲比賣語曾社神 並二處見祭焉

一云：・・・難波に詣で比賣語曾社神と爲った。また、豊國の國前郡に至り比賣語曾社神と爲った。

国前は国東であろう。何時から東になったのか。

三年 新羅王子天日槍來歸焉・・・一云 初天日槍 乘艇泊于播磨國 在於完粟邑・・・

新羅の王子の天日槍が來歸した。・・・一云： 乗った船は播磨國の完粟邑に泊った。・・・

五年 天皇幸來目 居於高宮

天皇は來目に向かい、高宮に居した。

來目と高宮は何処か。久留米と高良大社を連想する。版図における位置関係は？

廿五年三月 離天照大神於豐耜入姫命 託于倭姫命 爰倭姫命求鎮坐  
大神之處 而詣菟田筱幡（筱此云佐佐） 更還之入近江國 東廻美濃到  
伊勢國 時天照大神誨倭姫命曰 是神風伊勢國

天照大神が豊耜入姫命と別れるとき、倭姫命が大神と鎮坐する所を求めるように倭姫命を託した。まず、菟田筱幡に詣で、戻って近江國に入り、東に回り美濃国から伊勢国に至った。・・・

この頃に、伊勢神宮の前身の神社ができたかもしれない。

九十九年 天皇崩於纏向宮 纏向宮で天皇が崩御された。

崩御時の年齢が書かれていない。

### 9.3. 景行天皇紀

景行天皇の親征が書かれている。他には、神武天皇、途中で崩御した仲哀天皇、天武天皇(、大友皇子)など数少ない。

三年二月 ト幸于紀伊國 紀伊国に行幸した。

四年二月 天皇幸美濃 美濃に行幸した。

十一月 乘輿自美濃還 則更都於纏向 是謂日代宮

輿に乗り、美濃から還った。纏向に都を移した。これが日代宮である。

5年から11年までは、記事はない。12年から九州での話となる。

十二年七月 熊襲反之不朝貢 熊襲が叛き、朝貢しなくなった。

八月 幸筑紫 筑紫に行幸した。

これまで、熊襲が定期的に朝貢していたことになる。7月に熊襲の反乱を知り、8月に筑紫に出発した。このときの筑紫の範囲は？

九月 到周芳娑麼 時天皇南望之 詔羣卿曰 於南方烟氣多起 必賊將

在

周芳娑麼に到着した。天皇が南を望み、諸卿にいった：南に烟の気配が多数ある。必ず賊将がいる。

娑麼は佐波川下流域の防府市国衙とされている。景行天皇の時代に周芳(国)があったかは疑問である。

### 天皇遂幸筑紫 到豊前國長峽県 興行宮而居 故號其處曰京也

天皇は遂に筑紫到着し、豊前国の長峽県に到り、行宮をつくった。それゆえ、その地を京といった。

八月の 幸筑紫 は筑紫に向けて出発したとし、九月の 遂幸筑紫 は到着したと訳した。ここで、行宮を京としている。筑紫と豊前国が並ぶのは少し違和感がある。景行天皇の時に国と県の制度があったのかは疑問である。周芳ともに、(日本書紀編纂時)現在の地名を用いたとも考えられる。宮にかんしては、即位の年には宮の記事が無い。これは、遷都を行わなかったことかもしれない。

ピンイン 周芳：zhōu fāng、周防：zhōu fáng

十月 到碩田國 碩田国に到着した。

周芳娑麼に到って、筑紫を経て豊前国長峽県に到り、碩田国に着いた。ここは県ではなく国となっている。大分府内城の近くに碩田町がある。ここで、県と書かれているのは、オリジナルな物語に追加されたものと言えれば、面白いのだが、検討課題としておく。

Wiki「豊後国風土記」国名の由来では、

景行天皇の命で国を治めていた菟名手が豊前国仲津郡(行橋市みやこ町)を訪れたところ、白鳥が飛来し、はじめは餅に化し、その後、冬にもかかわらず何千株もの芋草(里芋)に化して茂った。菟名手がこれを天皇に報告したところ、天皇は「天の瑞物、土の豊草なり」と喜び、この地を豊国と名付けた。

大分県：県名の由来では、

<https://www.pref.oita.jp/soshiki/10400/symbol04.html>

豊後国風土記は、“おおいた”について景行天皇に由来を求めています。天皇がここに来たとき、広大なる哉、この郡は。よろしく碩田国と名づくべし、とし、これがのちに“大分”と書かれるようになった

といわれます。しかし、実際の大分平野は広大とは言いがたく、むしろ地形は狭く複雑であり、多き田→大分、との見解が最近の定説です。  
”おおいた”の由来です。(大分ガイド [O-BOOK]より抜粋)

oita ebooks | [https://www.oita-ebooks.jp/?page\\_id=2143](https://www.oita-ebooks.jp/?page_id=2143)

には、大分県の観光パンフレットやリーフレットが掲載されている。

Japan ebooks <https://www.japan-ebooks.jp/about>

は、一般社団法人ジャパンイーブックス活用研究会に加盟する「地域特化型電子書籍ポータルサイト「〇〇(都道府県名) ebooks」からなるネットワークの名称です。

## 十一月 到日向國 起行宮以居之 是謂高屋宮

日向国に到着し、行宮を造りここに留まった。高屋宮である。

## 十二月 議討熊襲 熊襲を討つことを議論した。

## 十三年五月 悉平襲國 因以居於高屋宮 已六年也 於是 其國有佳人 曰御刀媛 則召爲妃 生豊國別皇子是日向國造之始祖也

襲国を平定した。高屋宮に居ることすでに6年である。其国に佳人がいて、御刀媛という。妃とした。豊国別皇子を生んだ。日向国造の始祖である。

新陵墓探訪記「日向高屋宮」

<https://newryobo.fromnara.com/palace/p012-6>

では次の伝承地を挙げています。

1. 高屋神社(宮崎県西都市岩爪)
2. 黒貫寺(宮崎県西都市岩爪)
3. 高屋神社(宮崎県宮崎市村角町)
4. 高屋神社(鹿児島県肝属郡肝付町北方)

襲國は熊襲でよいと考える。正確には、ほかの選択肢を想いつかない。位置は確定されていない。阿蘇山の南辺りを想定している。この想定からは、宮崎市周辺は南すぎるので、延岡周辺も浮かんでくる。

**十七年三月 幸子湯縣 遊于丹裳小野 時東望之 謂左右曰 是國也直  
向於日出方 故號其國曰日向也**

子湯県に行幸した。丹裳小野で遊ぶ。東を望み左右に言った：この国は日の出る方向に向かっている。これより、その国を日向と言う。

**十八年三月 天皇將向京以巡狩筑紫國 始到夷守 是時於石瀨河邊・・・**

天皇は京に向かい筑紫の国で巡狩した。始め夷守に到った。この時石瀨河の



辺で . . .

子湯縣と丹裳小野に関しては、興味ある比定地はみつからなかった。

京が何処にあったか。文意からは、豊前国の長峽県である。日向國から京に向かうのに筑紫國を通った。他の経路はあるかもしれないが、熊襲を討つ軍勢を率いていることと、敵に攻撃されることは考える必要が無いと思われ、大軍を率いて通れる道を通ったはずである。

#### 四月 到熊縣 其處有熊津彦者兄弟二人

熊県に至った。そこに熊津彦兄弟2人が居た。

自海路泊於葦北小嶋而進食 海路により葦北小嶋に泊り、食事した。

熊県は文意からは筑紫國にあったとするのが自然。

#### 五月 從葦北發船到火國 於是日沒也 夜冥不知著岸 遥視火光

葦北より船で火國に至った。ここで日が暮れた。夜岸から遠くに火の光を見た。

文からは不知火海を連想する。火国は肥国か。

六月 自高來縣渡玉杵名邑 時殺其處之土蜘蛛津頼焉

高來県より玉杵名邑に渡る。・・・

到阿蘇國也 其國郊原曠遠 不見人居 天皇曰 是國有人乎 時有二神  
曰阿蘇都彦 阿蘇都媛 忽化人以遊詣之曰 吾二人在 何無人耶 故號  
其國曰阿蘇

阿蘇国に到った。・・・

高來県と玉杵名邑は火国にある。阿蘇国は初出。

七月 到筑紫後國御木 居於高田行宮

筑紫後國御木に到り、高田行宮に留まった。

到八女縣。則越藤山以南望粟岬

八女県に到った。藤山を越えて、南に粟岬を望んだ。

八月 到的邑而進食 的邑に到り、食事をした。

十九年九月 天皇至自日向 天皇は日向より至った。

至った先は、京とされた豊前国の長峽県と考える。

十二年からここまでの記事は九州の中である。十二年と十八年に平定の記事が書かれている。これらの記事から日付(気には日も書かれている)と地名を抜き出す。地名の後の数字は月を示す。

12年 熊襲反 7 → 到周芳娑麼 9 → 幸筑紫 → 豊前国長峽県  
→ 到碩田国 10 → 到日向国 11 → 議討熊襲 12

13年 悉平襲国 5

17年 幸子湯県(日向) 3 → 到日向国 11

18年 (巡狩筑紫國) 始到夷守 3 → 到熊縣 4

→ 從葦北發船到火国 5 → 自高來県渡玉杵名邑 6

→ 到阿蘇国 → 到筑紫後国御木 7 → 到八女県 → 到的邑 8

19年 天皇至自日向 9

12年7月から13年5月までの記事は熊襲平定の記事である。

17年3月からの記事は何の記事だろうか。日向の子湯縣に幸し、筑紫国の夷守を経て熊縣に到った。葦北より船で火國に到った。高來縣の渡玉杵名邑より阿蘇國に到った。筑紫後国の御木に至り、八女縣に到り到的邑に到った。その後日向に至った。

熊縣が何処かはわからないが、火国と阿蘇国ではなかったことになる。この2国は肥後(熊本県)にあるとする。

国だけの経路をみる。

筑紫国 → 豊前国 → 日向国 → (悉平襲国) → 日向国  
→ (巡狩筑紫國) → 火国 → 阿蘇国 → 筑紫国 → 日向(→京)  
である。襲国平定した後は、日向と肥における襲国以外の国の平定を行ったと考える。

これで、北・中九州を征服したことになる。これは、倭王(天皇)一代の事跡としては十分な偉業と思われる。とすれば、景行天皇紀は、景行天皇によるとされる征討記と日本武尊によるとされる征討記と辻褃合わせの記事から成ると考える。

筑紫島の四面 Wiki「筑紫国」で古事記の記事を引用している。

**次生 筑紫島 此島亦 身一而 有面四 面每有名 故 筑紫国謂 白日別  
豊国 言 豊日別 肥国 言 建日向日豊久士比泥別 熊曾国 言 建日別**

次に筑紫島を生んだ。この島は一体で4つの面をもつ。各面は名前がある。筑紫国は白日別、豊国は豊日別、肥国は建日向日豊久士比泥別、熊曾国は建日別である。

九州を筑紫島といい、筑紫国・豊国・肥国・熊曾国の4つの国があった。経路に現れる国と比べると、火国と肥国を同じとみれば、熊曾国が阿蘇国と日向となっている。2つに分かれたのか、別に日向を得たのかが考えられる。筑紫国が玄界灘(日本海)、豊国が瀬戸内海、肥国が有明海、日向が日向灘(太平洋)ではないか。また、女王国への旅程の時代は、筑紫国に豊国・肥国が加わる前の時代と考える。

#### **廿年 遣五百野皇女令祭天照大神**

五百野皇女を天照大神を祭るように派遣した。

何処で祭ったのか。

#### **廿五年 遣武内宿禰令察北陸 及東方諸國之地形 且百姓之消息也**

武内宿禰に北陸と東方諸国の地形と百姓の状況を査察するように命じた。

#### **廿七年二月 武内宿禰自東國還之奏言 東夷之中 有日高見國**

武内宿禰は東国より還って奏上した。東夷に高見国がある。

次の遠征先としては、九州から見れば、中国地方にせよ四国地方に

せよ、東征となる。廿五年と廿七年の記事はそのための威力偵察としては自然である。

廿七年十月から四十年十月までの14年間に日本武尊の話が書かれている。ここまでの熊襲平定の話と続く日本武尊の熊襲平定の話とよく似た話である。どんな関連があるか。

日本武尊については次節で扱う。

#### 四十年六月 東夷多叛 邊境騒動

東夷の多くが反乱し、邊境が騒がしくなった。

五十七年十月 令諸國興田部屯倉 諸国に田部屯倉を置くように命じた。

Wiki「屯倉」では、

ミヤケのミは敬語、ヤケは家宅のことで、ヤマト政権の直轄地経営の倉庫などを表した語である。それと直接経営の土地も含めて屯倉と呼ぶようになった。屯倉は、直接経営し課税する地区や直接経営しないが課税をする地区も含むなど、時代によってその性格が変遷したらしいが、詳しいことは分かっていない。大化の改新で廃止された。

屯倉制度は、土地支配でなく、地域民衆の直接支配である。管理の

仕方や労働力は多様であり、屯倉の経営は古墳の発達と関係しており、概観すると5世紀を境に前期屯倉と後期屯倉に分かれている。

前期屯倉は、顕宗・仁賢朝以前にできたという伝承をもつ屯倉であり、その設置地域は、朝鮮半島を除き畿内またはその周辺部に限られている。

**五十八年 幸近江國 居志賀三歳 是謂高穴穗宮。**

近江国に幸した。志賀に3年いた。これが、高穴穗宮である。

**六十年 天皇崩於高穴穗宮 時年一百六歳**

天皇は高穴穗宮で崩御された。このとき、106歳であった。

これより、47歳で即位したことになる。

## 9.4. 日本武尊

### 日本武尊

日本書紀では天皇でも摂政でもないので、当然日本武尊紀はなく、景行天皇紀に書かれている。

Wiki「ヤマトタケル」では

ヤマトタケルは、記紀などに伝わる古代日本の皇族。日本書紀では主に日本武尊、古事記では主に倭建命と表記される。現在では、漢字表記の場合に一般には日本武尊の用字が通用される。

第12代景行天皇皇子で、第14代仲哀天皇の父にあたる。熊襲征討・東国征討を行ったとされる日本古代史上の伝説的英雄である。

系譜の終わりに

古事記では、倭建命の曾孫の迦具漏比売命が景行天皇の妃となって大江王(彦人大兄)をもうけるとするなど矛盾があり、このことから景行天皇とヤマトタケルの親子関係に否定的な説がある。また、各地へ征討に出る雄略天皇などと似た事績があることから、4世紀から



7世紀ごろの数人のヤマトの英雄を統合した架空の人物という説もある。

と書かれている。

仲哀天皇紀では

日本武尊第二子也。母皇后曰兩道入姫命

と書かれている。ここで、母の兩道入姫命は皇后とされている。日本武尊は天皇であったことになり、知られている皇統と矛盾する。

Wiki「兩道入姫命」では次のように書かれている。

兩道入姫命(生没年不詳)は、記紀の登場人物。垂仁天皇の皇女で、母は山背国の大国不遲(大国之淵)の娘・綺戸辺(日本書紀より。古事記では弟苅羽田刀弁)。日本書紀では兩道入姫命、古事記では石衝毘売命と表記される。同母兄に磐衝別命がいる。

甥の日本武尊の妃となって仲哀天皇を生み、その即位後に皇太后になったとされる。日本書紀には仲哀天皇元年(192年)9月丙戌の日に、母の皇后を尊びて皇太后と曰す、と記しているものの、父である日本武尊は皇位に就いたことがないため、この時点で彼女が皇后であった事実はなかったことになる。また、古事記・日本書紀ともに彼

女に関する具体的な事績の記述を欠いている。そもそも、記紀ともに一致して記載している仲哀天皇の享年から計算できる生年(成務天皇 18 年・148 年)が日本武尊の死去から 36 年後にあたるという矛盾を抱えており、日本武尊と仲哀天皇、そして両者をつなぐ存在である両道入姫命が本当に実在していたかどうかは不明である。

Wiki「磐衝別命」

第 11 代垂仁天皇と、山背大国不遲(山代大国之淵)の娘綺戸辺(弟苅羽田刀弁)との間に生まれた第十皇子である。同母妹には両道入姫命(石衝毘売命: 第 14 代仲哀天皇の母)がいる。子には石城別王(石城別王/伊波智和希)、水齒郎媛(第 12 代景行天皇妃の五百野皇女の母)がいる。上宮記逸文(釈日本紀所収)には磐衝別命後裔の系譜の記載があり、五世孫振媛は彦主人王に嫁ぎ、乎富等大公王(第 26 代継体天皇)を生んだという。先代旧事本紀・天皇本紀では命を産んだ垂仁天皇の妃を丹波道主王の娘真砥野媛とし、同母兄弟に祖別命(記紀では異母兄弟)があると異伝を記す。また国造本紀では、四世孫として大兄彦君の名を伝える。

継体天皇は垂仁天皇の子磐衝別命の 5 世孫振媛を母としている。

日本書紀では、応神天皇の 5 世孫彦主人王の子となっている。共に父は彦主人王でその 5 世祖先が垂仁天皇と応神天皇と異なっている。これは、崇神天皇 = 応神天皇の傍証となるのではないか、

景行天皇紀に、日本武尊の熊襲征伐と東国遠征の話が書かれている。また、古事記にも同様の記事が書かれている。物語としては古事記のほうが面白く、よく知られている話は古事記のものである。これらは、簡単には訳せそうもないので、Wikipedia からの部分的引用で済ませることにする。

景行天皇紀と Wiki「ヤマトタケル」から遠征の行程を主に興味ある記事を抜き出していくことにする。古事記を引用している場合は、この Wiki「ヤマトタケル」の記事の引用か、その要約である。

まず、Wiki「ヤマトタケル」では遠征は西征(熊襲、出雲)と東征に分類されている。また、尊号について次が書かれている。

日本書紀・古事記・先代旧事本紀とも、本の名はヲウス(オウス)、亦の名はヤマトヲグナ(ヤマトオグナ)で、のちにヤマトタケルを称したとする。それぞれ表記は次の通り。

## 日本書紀・先代旧事本紀

本の名：小碓尊、小碓王、亦の名：日本童男、

のちの名：日本武尊、日本武皇子

## 古事記

本の名：小碓命、亦の名：倭男具那命、倭男具那王

のちの名：倭建命、倭建御子

小碓尊：xiǎo duì zūn、倭男具那命：wō nán jù nà mìng

景行天皇紀の記事を見ていく。

## 廿七年八月 熊襲亦反之 侵邊境不止

熊襲がまた反乱し、邊境を侵したが止められなかった。

## 廿七年十月 遣日本武尊令擊熊襲 時年十六

日本武尊に熊襲討伐に派遣した。このとき、16歳であった。

## 十二月 到於熊襲國 熊襲國に到着した

(熊襲平定の話)

既而從海路還倭 到吉備以渡穴海 其處有惡神 則殺之 亦比至難波

殺柏濟之惡神 (濟 此云和多利)

海路で倭に戻った。吉備では穴海を渡り、悪神を誅殺した。難波では柏濟の悪神を誅殺した。

廿八年二月 日本武尊奏平熊襲之状曰・・・

日本武尊は熊襲平定を次のように報告した。・・・

復路で吉備穴濟神と難波柏濟神を誅殺したが、往路では問題がなかったのか見過ごしたのか。

派遣される前にトラブルがあったようだ。Wiki「ヤマトタケル」からは

古事記では、父の寵妃を奪った兄大碓命に対する父天皇の命令の解釈の違いから、小碓命は兄を捕まえ押し潰し、手足をもいで、薦に包み投げ捨て殺害する。そのため小碓命は父に恐れられ疎まれて、九州の熊襲建兄弟の討伐を命じられる。

日本書紀では、古事記と異なり倭姫の登場がなく、従者も与えられている。従者には美濃国の弓の名手である弟彦公が選ばれる。弟彦公は石占横立、尾張の田子稻置、乳近稻置を率いて小碓命のお供をしたという。

兄殺しの話はなく、父天皇が平定した九州地方で再び叛乱が起き、熊襲の首長が川上梟帥一人とされる点と、台詞が古事記のものよりも天皇家に従属的な点を除けば、ほぼ同じ。

## 四十年六月 東夷多叛 邊境騒動

多くの東夷が反乱し、辺境が騒がしかった。

## 七月 天皇詔群卿曰 今東國不安

天皇は群卿を招集していった。今東国は俯瞰で・・・

## 十月 日本武尊發路之 日本武尊は出発した。

この後は、Wiki「ヤマトタケル」での東征の話となる。これを、日本武尊の東征と呼ぶことにする。日本書紀の経由地を拾ってみる。

伊勢神宮→駿河（焼津）→相摸（弟橘媛）→上總→陸奥国

（→日高見国）→常陸→甲斐国（酒折宮）→（信濃国・越国→）

武藏→上野→尾張→近江膽吹山→尾張→伊勢 尾津

古事記の経由地は

伊勢大御神宮→尾張國→相武國（焼津）→（蝦夷→）足柄之坂本

→甲斐坐酒折宮→尾張國→伊服岐能山→當藝野→杖衝坂→三重村

Wiki「ヤマトタケル」から

倭建命は八尋白智鳥となって飛んでゆく行先は、古事記では、伊勢を出て、河内の国志幾に留まり、そこにも陵を造るが、やがて天に翔り、

行ってしまう。日本書紀では、白鳥の飛行ルートは

能褒野→大和琴弾原(御所市)→河内古市(羽曳野市)

とされ、その3箇所に陵墓を作ったとする。こうして白鳥は天に昇った。

本編の序で述べた「加上説を考慮すれば、崇神天皇と神功皇后の間の記事は、神功皇后以後のことである」と作業仮説 I12「応神天皇廿五年は百済の腆支王十六年で、420年である。元年は396年となる」と作業仮説 I14「倭の五王の時代に倭の東遷が行われた」から、熊襲平定は400年以前に行われたと考える。

東征は近畿から見ての東国の話とされている。本稿の立場からは、北九州から見た東国の話を、近畿から見た東国の話に置き替えたと考えたい。

九州から見て東国とは、四国の瀬戸内海沿岸(伊予・阿波)中国の瀬戸内海沿岸(安芸・吉備)と日本海沿岸(出雲)が考えられる。

日本書紀では、熊襲討伐の還りに、吉備では穴海を渡り悪神を誅殺し、難波では柏濟の悪神を誅殺したと書かれている。往きでなく還りにしたのは、討伐の時系列順を変えないための処置かもしれない。

一方古事記では、熊襲討伐後、還り道で山神・河神・穴戸神が講和し参上したと書かれた後、出雲健誅殺の話が書かれている。

Wiki「ヤマトタケル」では

倭建命は山の神、河の神、また穴戸の神を平定し、出雲に入り、出雲建と親交を結ぶ。しかし、ある日、出雲建の大刀を偽物と交換して大刀あわせを申し込み、殺してしまう。そうして「やつめさす 出雲建が 佩ける大刀 つづらさは巻き さ身無しにあはれ」と歌う。こうして各地や国を払い平らげて、朝廷に参上し復命する。

日本書紀では、崇神天皇の条に出雲振根と弟の飯入根の物語として、酷似した話があるが、日本武尊の話としては出雲は全く登場しない。熊襲討伐後は毒気を放つ吉備の穴濟の神や難波の柏濟の神を殺して、水陸の道を開き、天皇の賞賛と寵愛を受ける。

安芸と四国を除いては、かなりの地名が現れてきた。

焼津の地名と野火の話は、秋吉台のカルスト台地での話。海難に対して、弟橘比売の入水の話は、相模から上総に渡る際となっているが、九州から四国へ渡る話。伊吹山は、大山などを想いつくが、可能ならば7節考察で扱うことにする。



## 9.5 成務天皇紀・仲哀天皇紀

### 成務天皇紀

三年 以武内宿禰爲大臣也 武内宿禰を大臣とした。

五年 令諸國 以國郡立造長 縣邑置稻置 並賜楯矛以爲表 則隔山河  
而分國縣 隨阡陌以定邑里 因以東西爲日縱 南北爲日横 山陽曰影面  
山陰曰背面

国郡には造長を立て、縣邑には稻置を置くように諸国に命じた。・・・

これ以降は次の2つの記事のみである。

四十八年 立甥足仲彦尊爲皇太子 甥の足仲彦尊を皇太子とした。

六十年 天皇崩 時年一百七歳。 崩御された。107歳であった。

これから、48歳で即位したことになる。

## 仲哀天皇紀

前文：足仲彦天皇 日本武尊第二子也 母皇后曰兩道入姫命

日本武尊の第2子で、母は皇后の兩道入姫命である。

母が皇后となっている。これからは、父の日本武尊は天皇であったことになる。

崇神天皇から神功皇后の間で、不慮の死とは言え、在位期間が8年と短い。他は60年以上である。

二年正月 立氣長足姫尊爲皇后 先是 娶叔父彦人大兄之女大中姫爲妃 生口坂皇子 忍熊皇子 次娶來熊田造祖大酒主之女弟媛 生子譽屋別皇子

氣長足姫尊を皇后とした。・・・

二月 幸角鹿 即興行宮而居之 是謂筥飯宮

角鹿に行幸し、行宮を興しここに留まった。これが筥飯宮である。

Wiki「氣比神宮」では

氣比神宮、福井県敦賀市曙町にある神社。式内社(名神大社)、越前

国一宮。旧社格は官幣大社で、現在は神社本庁の別表神社である。

神宮の社名について、史料には主なものとして次の呼称が見える。  
この後筥飯大神/筥飯神(日本書紀) と書かれている。また境内社の  
角鹿神社は敦賀の地名発祥地であると伝える。

即月 定淡路屯倉 淡路屯倉を定めた。

淡路は淡路島と思う。語呂合わせて、淡路＝阿波路 の可能性は考  
えられるのか。また、阿波と安房は。

阿波: ā/ē bō、安房: ān fáng

三月 天皇巡狩南國 於是 留皇后及百寮 而從駕二三卿大夫 及官人  
數百而輕行之 至紀伊國而居于德勒津宮 當是時 熊襲叛之不朝貢 天  
皇於是將討熊襲國 則自德勒津發之 浮海而幸穴門 即日使遣角鹿 勅  
皇后曰 便從其津發之 逢於穴門

天皇は南国を巡狩した。皇后と百寮は留まり、二三の卿大夫が從駕し、官人  
數百が輕行した。紀伊國に至り、于德勒津宮に留まった。このとき、熊襲が反  
乱し、朝貢をしなかった。天皇は熊襲國を討とうとして、德勒津を發し、海路  
で穴門に幸した。すぐに使いを角鹿に派遣し、皇后に勅した。これに従い津を

発し、穴門で逢った。

紀伊國に徳勒津宮があった。ここから海路で穴門に向かった。即日が発した日か着いた日か判断できないが、紀伊國から角鹿に使いを送り穴門で落ち合ったことになる。紀伊國と敦賀では少し遠い気がする。

ここまでに現れた地名は、角鹿 筥飯宮、淡路屯倉、紀伊國 徳勒津宮 と、熊襲國に行くために、徳勒津から海路で行く穴門である。

webl.io 辞書「穴門(あなと)」では、関門海峡の古名。また、長門国一帯の古名。

コトバンク「穴門国とは」世界大百科事典内の穴門国の言及では、山陽道西端に位置する中国(延喜式)。律令制以前、その南西地方の下関海峡付近を穴門国と呼び、穴門国造が支配した。長門の国名は665年(天智4)が初見で、そのころから国司が管治する国となった。

六月 天皇泊于豊浦津 且皇后從角鹿發而行之 到渟田門 食於船上 時海鯽魚多聚船傍 皇后以酒灑鯽魚 々々即醉而浮之 時海人多獲其

魚而歡曰 聖王所賞之魚焉 故其處之魚 至于六月常傾浮如醉 其是之緣也

天皇は豊浦津に泊った。皇后は勅に従って角鹿を發し、渟田門に到った。・・・

七月 皇后泊豊浦津 ▼是日 皇后得如意珠於海中

皇后は豊浦津に泊った。この日、皇后は海中で如意珠を得た。

九月 興宮室于穴門而居之 是謂穴門豊浦宮

穴門に宮室を興し、留まった。これを穴門豊浦宮という。

穴門に豊浦宮があった。角鹿から穴門への途中に渟田門があった。海路での門は海峡ではないか。

穴門豊浦宮は後でも現れる。位置については、「日本神話・神社まとめ」穴門の豊浦宮では <https://nihonsinwa.com/page/3000.html>

穴門の豊浦宮は古事記・日本書紀に登場する地名。仲哀天皇が滞在した宮で、仲哀天皇が死んだ後に殯を行った土地。現在の忌宮神社(下関市)かその周辺のことだと思われます。とされている。

三年から七年までの 5 年間は記事が無い。熊襲国を討つための準備か。

八年正月 幸筑紫 時岡縣主祖熊鰐 聞天皇之車駕 豫拔取五百枝賢木  
以立九尋船之舳 而上枝掛白銅鏡 中枝掛十握釧 下枝掛八尺瓊 參  
迎于周芳沙麼之浦而獻魚鹽地 因以奏言 自穴門至向津野大濟爲東門  
以名籠屋大濟爲西門 限沒利嶋 阿閉嶋爲御筥 株柴嶋爲御口（御口  
此云彌那陪） 以逆見海爲鹽地 既而導海路 自山鹿岬 廻之入崗浦 到  
水門御船不得進 則問熊鰐曰・・・自穴門至向津野大濟爲東門 以名籠  
屋大濟爲西門 限沒利嶋 阿閉嶋爲御筥 株柴嶋爲御口（御口 此云彌  
那 陪）

筑紫に幸したとき、岡縣主の祖の熊鰐は、天皇の車駕を聞き（・・・をし）周  
芳沙麼之浦で参迎し、魚鹽地を獻じ、次のように申し上げた。穴門より向津野  
大濟までを東門とし、名籠屋大濟を西門とし、沒利嶋 阿閉嶋を御筥とし、株柴  
嶋を御口とする・・・

筑紫の内と思われる幾つかの地名が書かれている。宮（あるいは  
京）の指定と思われる。○門は○面ではないか。この前に書かれてい  
る豊浦津は筑紫ではないことになる。上の豊浦宮から、豊の国かもし  
れない。しかし、穴門豊浦宮とあるから、若干の疑問が残る。

筑紫には国が付いていない。これから、国のついでに越國と紀伊

國は新しいといえるか。

到儼縣 因以居檀日宮 儼縣に到り、檀日宮に住まった。

神功皇后紀からは、檀日宮は筑紫にあった。

九月 詔群臣以議討熊襲 時有神託皇后而誨曰 天皇何憂熊襲之不服  
是膺完之空國也 豈足舉兵伐乎 愈茲國而有寶國 譬如處女之口・・・  
天皇聞神言 有疑之情 便登高岳遥望之 大海曠遠而不見國 於是 天  
皇對神曰・・・

群臣を招集して熊襲を討つことを議した。・・・

この記事から、朝鮮半島の故地を維持するのと日本列島の征服を  
続ける2路線の対立があったことが考えられる。

九年二月 天皇忽有痛身 而明日崩 時年五十二 即知 不用神言而早  
崩（一云 天皇親伐熊襲中賊矢而崩也） 則皇后詔大臣及中臣烏賊津  
連 大三輪大友主君 物部膽咋連 大伴武以連曰 今天下未知天皇之崩  
若百姓知之有懈怠者乎 則命 四大夫 領百寮令守宮中 竊收天皇之屍

## 付武内宿禰 以從海路遷冗門 而殯于豐浦宮 爲无火殯斂

天皇は体に痛みをもった。翌日崩じた。52歳であった。・・・

四大夫はここに書かれている、中臣烏賊津連・大三輪大友主君・物部膽咋連・大伴武以連だろう。この前に大臣があるが名前が書かれていない。話の筋から、冗門は穴門か。

## 是年 由新羅役 以不得葬天皇也

この年は新羅役であるから、天皇を葬ることは出来なかった。

議討熊襲 したはずだが、新羅役となっている。一書では、熊襲を親伐中敵の矢にあたり崩じた、となっている。



## 9.6 神功皇后紀

神功皇后といえは三韓征伐を連想する(ように聞かされてきた)。

ここでは(卑弥呼・)壹與の時代を日本書紀から神功皇后紀を中心に考えてみる。

日本書紀で主役的な女性が何人か現れる。初めは伊邪那美命であるが、単独で現れることはない。次は皇祖ともされている天照大神で3人目は三韓征伐を行ったとされている神功皇后である。神功皇后には1巻を当て、天皇並みである。

三韓征伐はともかく、神功皇后は朝鮮と関係が深いことは日本書紀からもうかがえる。時代は下がるが、飯豊青皇女も摂政であるが、天皇であったとする文献もあるという。この次は少し時代が下がるが、推古天皇である。

女性の摂政はこの後現れないが、聖徳太子・中大兄皇子・草壁皇子の3人が皇族で摂政となった(Wiki「摂政」)。いずれの場合でも、皇位継承をめぐると思われる政権抗争があった時代と考える。

神功皇后は、摂政とされているが、天皇のいない摂政である。神功皇后を卑弥呼とすれば摂政というのはおかしい。

日本書紀では、神功皇后が摂政に就いたとは書かれていない。仲哀天皇崩御後しばらくは皇后として扱われ、伐新羅之明年10月に皇后を皇太后とし、摂政元年とすると書かれているだけで、曖昧さがのこる。実質的には女帝であったようである。日本書紀の作者はここに女王をおくことが必要と考えたようだ。これは正史と合わせるためであったのではないか。とにかく、神功皇后紀をみていこう。

仲哀天皇九年 200 二月 足仲彦天皇崩於筑紫檀日宮 時皇后傷天皇不從神教而早崩 以爲 知所崇之神 欲求財寶國 是以 命群臣及百寮 以解罪改過 造齋宮於小山田邑

仲哀天皇が筑紫檀日宮で崩じた。・・・齋宮を小山田邑に造った。

仲哀天皇紀九年二月では、以從海路遷冗門 而殯于豊浦宮 とある。小山田邑はどこか。

神社探訪「齋宮」では

<http://www.komainu.org/fukuoka/kasuyagun/Itsukinomiya/ituki.html>

日本書紀巻第九、神功皇后(氣長足姫尊)の章には、夫である仲哀天皇がお亡くなりになられた香椎宮、応神天皇をお産みになられた宇

美八幡宮などとともに齋宮の事が記されています。

日本書紀よると神功皇后は仲哀天皇が香椎でお亡くなりになると、小山田邑に齋宮を作らせ、天皇の亡骸を運んで安置し、自ら神主とされています。この齋宮の故地について、江戸時代の学者、貝原益軒が筑前国続風土記のなかで次のように述べています。

聖母屋敷、上山田村にあり。其の所に、神功皇后の御社あり。是、神功皇后齋宮の址なるにや。此山田村は、香椎に近ければ、此村にある聖母屋敷こそ、まさしき齋宮の址には侍るべき。

ここ山田の地に鎮座する齋宮は、日本最古の国史に記載された小山田邑齋宮の比定地とされる神社です。

Wiki「齋宮」では

日本書紀崇神天皇紀によれば、崇神天皇が皇女豊鍬入姫命に命じて宮中に祭られていた天照大神を大和国の笠縫邑に祭らせたとあり、これが齋王(齋宮)の始まりとされる。そして次の垂仁天皇の時代、豊鍬入姫の姪にあたる皇女倭姫命が各地を巡行し伊勢国に辿りつき、そこに天照大神を祭った。この時のことを日本書紀垂仁天皇紀は、齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ、と記している。

また、Wiki「齋王」では、伊勢神宮または賀茂神社に巫女として奉

仕した未婚の皇女、と書かれている。

大和国の笠縫邑はどこか。Wiki「笠縫邑」では

比定地については、檜原神社(桜井市 三輪)、多神社(磯城郡 田原本町多)、笠縫神社(磯城郡田原本町秦荘、秦楽寺境内南東隅)、笠山荒神社(桜井市笠)、多神社摂社の姫皇子神社、志貴御県坐神社(桜井市金屋)、小夫天神社(桜井市小夫)、穴師坐兵主神社(桜井市穴師)、飛鳥坐神社(高市郡 明日香村飛鳥)、長谷山口坐神社(桜井市初瀬手力雄)、等々。

と書かれている。これだけ挙げるということは、よくわからないということであろうか。

**三月皇后選吉日 入齋宮 親爲神主 則命武内宿禰令撫琴 喚中臣烏賊津使主 爲審神者**

皇后は吉日を選んで齋宮に入った。神主と為り、武内宿禰を令撫琴を命じ、中臣烏賊津使主を審神者と為した。

Wiki「審神者」では

審神者とは、古代の神道の祭祀において神託を受け、神意を解釈し

て伝える者のことである。後には祭祀の際に琴を弾く者を指すようにもなった。

と書かれている。

仲哀天皇は戦役中であるため葬儀は行われなかったとしたが、不得葬は埋葬、すなわち、陵の造営が出来なかったというほうが自然である。

Wiki の記事から斎宮は斎王のすむところであり、葬儀とは関係が無いと思われる。女性(皇女)を天皇(代理)とするには、斎宮において所定の神事を行うことが必要であったと考える。

三国志の卑弥呼の記事 共立一女子爲王 名曰卑彌呼事鬼道 能惑衆 年已長大 無夫婿 有男弟佐治國 を思い浮べる。事鬼道 能惑衆 と混乱時に女王となったこと、および、後継者を定めるシステムを備えていたことから、倭(部族連合王国)の国家巫女的な存在では無かったのと考えている。卑弥呼の宗女として臺與が倭王となったことから、未婚の諸王家の女性から宗女というかたちで引き継がれたのではないか。その居住するところは、古代ギリシャのアクロポリスの要素もあったかもしれない。例えば、部族連合の協議の場所や、武器

などを貯える兵站的な機能を持っていたのではないかと考える。

日本列島への移住に伴い倭王の権威が増し、部族連合のものから、王家のものとなり、最終的には伊勢神宮となったと考えている。

続いて

### 皇后欲撃熊鷲 而自檀日宮遷于松峽宮 時飄風忽起 御笠墮風

皇后は熊鷲を撃つことを望んだ。よって、檀日宮より松峽宮に遷った。

### 至層増岐野 即舉兵撃羽白熊鷲而滅之

層増岐野に至った。すぐに兵を挙げ、羽白熊鷲を撃ち、これを滅ぼした。

檀日宮より松峽宮に移った。檀日宮は仲哀天皇紀にある筑紫に入ったときに作った宮で、仲哀天皇はここで崩じた。松峽宮はここが初出である。

熊鷲とは。話の筋としては、仲哀天皇が戦闘中に矢にあたり崩じた熊襲が自然であり、熊襲の誤記(誤写)しか思い浮かばない。

びんいん 鷲: jiù、襲: xí

四月 北到火前國松浦縣 而進食於玉嶋里小河之側・・・故時人號其處  
曰梅豆羅國・・・

北に火前國松浦縣に到った。さらに進めて、玉嶋里の小河の畔で食事をした。・・・その所を梅豆羅国といった。

火前國は肥前國であろうか。国が前(中)後上下に分かれるのは何時か。ここに松浦縣があった。現在の長崎県松浦市でいいだろう。

縣は仲哀天皇紀で、時岡縣主祖熊鰐 と 到儼縣 の2か所で現れている。

九月 令諸國 集船舶練兵甲 時軍卒難集 皇后曰・・・

諸国に命じ船舶を集め、兵甲を練った。軍卒を集めるのが困難となり、皇后が言った。・・・

軍卒難集 の訳は、軍卒が集まるのが難しい、ではないだろうか。

十月 從和珥津發之 時飛廉起風 陽侯舉浪 海中大魚 悉浮扶船 則大  
風順吹 帆船隨波 不勞櫓楫 便到新羅 時隨船潮浪 遠逮國中

和珥津を發した。・・・新羅に到った。・・・

和珥津は九州の何処かであろう。対馬の和珥津としているものが多数である。

以下は新羅討伐の記事。九月に軍備を整え、十月に出発し、十二月までに新羅を討ち、筑紫に還ったことになっている。これが可能か。その前に 200 年代に新羅があったのかが疑問である。昔王朝の可能性は残るが、辰韓の地に新羅があるのは、少なくとも、帯方郡の滅びた 313 年以降と考える。

百濟本記では倭との抗争や交易の記事は殆どない。一方、新羅本記では倭との抗争の記事が多い。日本書紀でも同様である。金王朝は旧倭出身ではないか。百濟とは直接接していなくて、王族が親しいのに対し、新羅は接していて、家臣(国民)レベルで親しかったのではないか。

Wiki「三韓征伐」の冒頭では、三韓征伐は、神功皇后が新羅出兵を行い、朝鮮半島の広い地域を服属下においたとされる戦争を指す、と書かれている。神功皇后紀に三韓を討つ話はないので、新羅征伐というべきであろう。何時頃から三韓征伐と言われたのかはわからないが、神功皇后紀に記されている 200 年代に正史に書かれている国は韓に馬韓・辰韓・弁韓(弁辰)であることから名付けられたと想ってい



る。

十二月 生譽田天皇於筑紫 応神天皇を筑紫で生んだ。

妊娠中に新羅討伐を行ったことになる。

この記事に続く一云 の中に 新羅王宇流助富利智干 がある。尼師今に対応するのは利智干

ピンイン 利智干: lì zhì gān/gàn、尼師今: ní shī jīn

宇流助富: yǔ liú zhù fù、儒理: rú lǐ

この年は、摂政となる前年であり、作業仮説 I10 からは、200 年となる。200 年の新羅の王は、新羅本記では、10 代(昔 3 代)奈解尼師今 196-230 である。修正王統では、朴 3 代儒理尼師今 197-230 か、昔 3 代、奈解尼師今 197-231 である。再修正王統では、朴 3 代儒理尼師今 191-244 となる。ピンインからは、儒理尼師今かとも思われる。

於是 從軍神表筒男・中筒男・底筒男 三神誨皇后曰 我荒魂 令祭於穴門山田邑也 時穴門直之祖踐立・津守連之祖田裳見宿禰 啓于皇后曰 神欲居之地 必宜奉定 則以踐立 爲祭荒魂之神主 仍祠立於穴門山田邑

ここで、從軍神の表筒男・中筒男・底筒男 三神が皇后に次のようにさとした。我は荒魂である。(我が荒魂を)穴門山田邑に祭るように。

爰伐新羅之明年(十年)201 二月 皇后領群卿及百寮 移于穴門豐浦宮  
即收天皇之喪 從海路以向京 時麿坂王・忍熊王 聞天皇崩 亦皇后西  
征 并皇子新生 而 密謀之曰 今皇后有子 群臣皆從焉 必共議之立幼  
主 吾等何以兄從弟乎 乃詳爲天皇作陵 詣播磨興山陵於赤石 仍編船  
縵于淡路嶋 運其嶋石而造之・・・

皇后群卿と百寮を領し、穴門豐浦宮に移った。・・・

穴門豐浦宮は仲哀天皇二年に現れる。この後筑紫に行った。

三月 命武内宿禰和珥臣祖武振熊 率數萬衆 令擊忍熊王

武内宿禰と和珥臣祖の武振熊に命じて数万を率いて忍熊王を撃たせた。

上の和珥津と関係があるのか。忍熊王とは。どこで戦ったのか。

十月 群臣尊皇后曰皇太后 是年也 太歳辛巳 則爲攝政元年

群臣は皇后を皇太后と敬った。この年が摂政元年である。

この節の初めに扱った。仲哀天皇十年に攝政となった。この年を即位年とすれば 201 年となる。これは卑弥呼の即位年としてもおかしくないと思われる。

## 二年 202 十一月 葬天皇於河内國長野陵

天皇を河内国長野陵に葬る。

## 三年 203 立譽田別皇子 爲皇太子 因以 都於磐余 是謂若櫻宮

譽田別皇子を皇太子とした。都を磐余とした。これが若桜宮である。

## 五年 205 新羅王遣汗禮斯伐毛麻利叱智富羅母智等朝貢

新羅王が汗禮斯伐毛麻利叱智富羅母智らを派遣し朝貢した。

前に述べたように、205 年に新羅があったかは疑わしい。

6 年から 12 年までの 7 年間記事は無い。

## 十三年 213 二月 命武内宿禰 從太子令拜角鹿筥飯大神

武内宿禰に太子に従い角鹿筥飯大神を拜するよう命じた。

14 年から 38 年までの 25 年間記事は無い。39 年から、2 章で取り挙げた「魏志云」で始まる記事が 3 つ続く。

卅九年 239 是年也 太歲己未 魏志云 明帝景初三年六月 倭女王遣大夫難斗米等 詣郡 求詣天子朝獻 太守鄧夏遣吏將送詣京都也

四十年 240 魏志云 正始元年 遣建忠校尉梯携等 奉詔書印綬 詣倭國也

四十三年 243 魏志云 正始四年 倭王復遣使大夫伊聲者掖耶約等八人 上獻

この後 45 年まで記事は無い。天皇紀としての本来の記事は、14 年から 45 年まで 32 年間無かったことになる。

この間は神功皇后が政務とっていたことになる。32 年の間 3 つの引用記事しか無いということは有り得るだろうか。

では、何故この空白があるか。1 つは三国志の記事を此処に置きたかったということが考えられ、これから作業仮説 I10「紀神功皇后四十年は三国魏の正史元年で西暦 240 年である。神功皇后 1 年は 201 年である」を得た。

四十六年 246 遣斯摩宿禰于卓淳國於是 卓淳王末錦早岐 告斯摩宿禰 曰・・・時百濟肖古王

斯摩宿禰を卓淳國に派遣した。卓淳王の末錦早岐は斯摩宿禰に告げた：・・・

**四十七年 247 百濟王使久氏 彌州流 莫古 令朝貢 時新羅國調使 與  
久氏共詣・・・**

百濟王は久氏 彌州流 莫古らを朝貢の使いとした。このとき、新羅も使いを同行させた。

主語が百濟でなく百濟王となっている。

240年では、百濟と新羅は存在していなかった。前百濟・前新羅の可能性は考えられないことはないが、この場合どこにいたのか。

上記記事に続き、「新羅が百濟の貢ぎ物を奪った」ことが書かれている。これに関しては既に触れてきたが、ここで疑問としておこう。

**疑問 IV01.** 200年代には正史に現れていなかった百濟と新羅の記事が何故書かれているのか。

まず思い付くのは、百濟・新羅の時代の記事をここにもってきたことである。他に考えられるのは、正史には書かれていないが、(前)百濟・(前)新羅は存在していたとすることであるが、倭に対抗できる勢力があれば、帯方郡に察知され、その記録として書かれ、皇帝にも報

告されたはずである。

もう一つは、神功皇后の崩御年を繰り下げたかったということが考えられる。この場合は、帯方郡の滅びた 313 年以降になる。これは、作業仮説 I10 から修正した神功皇后紀の記年と合わない。

四十九年 249 以荒田別 鹿我別爲將軍 則與久氏等 共勒兵而度之 至卓淳國 將襲新羅 時或曰 兵衆少之 不可破新羅 更復 奉上沙白・蓋盧 請增軍士 即命木羅斤資・沙々奴跪領精兵 與沙白・蓋盧共遣之 俱集于卓淳 擊新羅而破之 因以 平定 比自焮・南加羅・喙國・安羅・多羅・卓淳・加羅、七國 仍移兵 西廻至古爰津 屠南蠻忱彌多禮 以賜百濟 於是 其王肖古及王子貴須 亦領軍來會

荒田別と鹿我別を將軍とし、久氏とともに兵をととのえ渡り、卓淳國に至った。新羅を襲ったが、兵が少なく、新羅を破ることは出来なかった。 . . .

五十年 250 二月 荒田別等還之 荒田別らが還った。

五月 千熊長彦 久氏等 至自百濟

千熊長彦・久氏らが百濟より至った。

五十一年 251 三月 百濟王亦遣久氏朝貢

百濟王がまた久氏を派遣し朝貢した。

即年 以千熊長彦 副久氏等遣百濟國 因以 垂大恩曰 . . .

千熊長彦と副の久氏らを百済に派遣し伝えた . . .

五十二年 252 久氏等從千熊長彦詣之 則獻七枝刀一口・七子鏡一面  
及種々重寶

久氏らは千熊長彦を従えて詣で、七枝刀一口・七子鏡一面 及種々重寶を献じた。

Wiki「七枝刀」では

七支刀は、石上神宮に伝来した古代の鉄剣である。剣身の左右に段違いに3本ずつの枝刃を持つ剣で、剣身に金象嵌の銘文が表裏60余字記されているが、錆による腐食がひどく読み取れない文字もある。

由来は早くに忘れられ、神宮ではこれを「六叉の鉾」と呼び、神田にその年はじめて苗を植える儀式に神を降ろす祭具として用いていたという。1874年(明治7年)に石上神宮大宮司となった菅政友は、剣身に金象嵌銘文が施されていることを発見し、さらに剣の錆を落として、はじめてその銘文の解読を試みた。以来その銘文の解釈・判読を巡って研究が続いている。

日本書紀には七枝刀との記述があり、4世紀頃、倭に対し百済が朝貢した際に献上されたものとされ、関連を指摘されている。

銘文 表：泰□四年□月十六日丙午正陽造百鍊□七支刀□辟百兵宜

供供（異体字、尸二大）王□□□□作 泰□四年十□月十六日丙午正

陽造百鍊□七支刀□辟百兵宜供供侯王□□□□作

裏：先世（異体字、口人）来未有此刀百濟□世□奇生聖（異体字、音又は

晋の上に点）故為（異体字、尸二大王旨造□□□世 先世以来未有此

刀百濟□世□奇生聖音故為倭王旨造□□□世

なお、この時七支刀と同時に奉られた七子鏡は、アメリカ合衆国のボストン美術館に所蔵されている銅鏡ではないかとする説がある。

この鏡は、鏡背の主文様帯に乳が7つあり、七子鏡の名称に相応しいという。これらの遺物は、1875年（明治8年）大雨で崩れた大仙陵古墳（仁徳天皇陵）から出土したものと伝えられ、ボストン美術館には銅鏡、環頭大刀など5点が収蔵されている。これらの品は、1908年（明治41年）には既に博物館に所蔵されていた。

と書かれている。

五十五年 255 百濟肖古王薨 百濟の肖古王が薨かった。

五十六年 256 百濟王子貴須立爲王 百濟王子の貴須が王となった。

神功皇后紀からは、四十七年 247 の記事の百濟王は肖古王で、五十



五年 255 に崩御したことになる。

肖古王の在位期間は、百済本記からは 166 年から 214 年、表 IIII05 修正百済王統 からは 238 年から 286 年となる。

57 年から 61 年までの 5 年間記事は無い。

### **六十二年 262 新羅不朝 即年 遣襲津彦撃新羅**

新羅が朝貢をしなかった。襲津彦を派遣し、新羅を討った。

262 年の新羅王は、新羅本記では味鄒(金)、修正王統では、祇摩(朴)と沾解か儒礼(昔)、再修正王統では婆娑(朴)と脱解(昔)である。

### **六十四年 264 百済國貴須王薨王子枕流王立爲王**

百済國の貴須王が薨じ、王子の枕流王が王となった。

### **六十五年 265 百済枕流王薨 385 王子阿花年少 叔父辰斯奪立爲王**

百済の枕流王が薨じた。王子の阿花が年少であったため、叔父の辰斯が王となった。

貴須王は仇首王で在位期間は 214 年から 234 年である。264 年の百

済王は、百済本記では古尔王 234-286、修正王統では肖古王 238-286 か蓋婁王 236-274 であるが崩御年は一致しない。一方、枕流王は近仇首王 375-384 の元子で在位期間は 38 年から 385 年までで、この後は、辰斯王 385-392、阿莘王 392-405 と続く。

百済本記の記事は近尚古王以降を信用できるとしてきた。六十五年に記事の百済の王統と枕流王の在位期間は百済本記と合っている。日本書紀の作者は、385 年の記事を 265 年にもってくることにより、130 年を縮めたのではないかということは、Part I の課題 1,2 で考察し、Part III 7 章でも触れた。現状ではそれら以上の進展はない。

**六十六年 266 是年 晉武帝泰初二年 266 晉起居注云 武帝泰初二年十月 倭女王遣重譯貢獻**

この年は、晋の武帝泰初二年である。晋の起居注からは、武帝の泰初二年十月に、倭の女王が朝貢した。

この 3 つの記事も本来の記事と言い難く、53 年以降は 62 年の記事と崩御の記事のみとなる。

## 六十九年 269 皇太后崩於稚櫻宮 時年一百歳

皇太后が稚櫻宮で崩じた。100歳であった。32歳で即位した。

この記事から、摂政という役職に就いたのではなく、皇太后として政治を摂ったと考える。

コトバンク「起居注」では、世界大百科事典 第2版の解説を引用している。

中国、歴代の王朝で皇帝の起居・言動を記した日記体の官撰記録。皇帝近侍の官がこれをつかさどり、その官もまた起居注といった。その起源ははなはだ古く、周代に始まったといわれるが、記録に残るものとしては、後漢の明帝起居注が最初である。これが制度として完備されたのは隋・唐のころであるが、皇帝の起居・言動はそのまま天下国家のうごきであるから、起居注はひろく国家の記録であるとみなされた。そして四季の終りごとにこれを史官に送り、史官はこれを整理して皇帝が死ぬとその皇帝の一代記すなわち実録とした。

神功皇后四十年は西暦 240 年を基準として、上記空白期間を圧縮することを試みる。

233 元年 201 群臣尊皇后曰皇太后 是年也太歳辛巳 則爲攝政元年

- 234 二年 202 葬天皇於河内國長野陵
- 235 三年 203 立譽田別皇子 爲皇太子
- 237 五年 205 新羅王遣汗禮斯伐毛麻利叱智富羅母智等朝貢
- 238 十三年 213 命武内宿禰
- 239 三十九年 239 是年也太歲己未 魏志云 明帝景初三年六月
- 240 四十年 240 魏志云 正始元年
- 243 四十三年 243 魏志云 正始四年
- 246 四十六年 246 遣斯摩宿禰于卓淳國於是 . . . 時百濟肖古王
- 252 五十二年 252 久氏等從千熊長彦詣之 . . .
- 253 六十二年 262 新羅不朝 即年 遣襲津彦擊新羅
- 260 六十九年 269 皇太后崩於稚櫻宮 時年一百歲

となり、崩御年は卑弥呼の没年の範囲に含まれる。

## 9.7 考察

崇神天皇から仲哀天皇までの記事のうち、最もよく知られているのは、日本武尊の物語であろう。対熊襲戦争の記録としては、景行天皇紀の十二月年から十三年五月の記事のほうがふさわしい。

両者とも史実とすれば、書かれている戦闘の規模から、前者は前哨戦で、後者が征服を行なったと考えられる。これは時間を逆にしてかかれていることになる。

崇神天皇紀から仲哀天皇紀までで、戦闘記事が書かれているのは景行天皇紀のみである。複数の倭王(天皇)による戦闘記事を景行天皇紀にまとめたのではないかと考える。ただし、仲哀天皇紀では、戦闘直前に天皇が崩御となっている。

戦闘記事には〇〇の祖がついている。戦いの時期や場所を変えてでも、この話は残す必要があったと考える。

三国志の時代には北九州の征服中であった。北九州征服後、次の征服先は、九州南部、大分県から四国、中国西部の3方向が考えられるのは既に述べた。さらには、朝鮮半島の故地の維持・回復も挙げられる。このうち、陸続きの九州中南部の制圧は倭にとって最大の懸案で

あったはずであり、これは 3 世紀から 4 世紀にかけて行われたと考  
えている。

Wiki「熊襲」では、

肥後国球磨郡(現熊本県人吉市周辺、球磨川上流域)から大隅国曾  
於郡(現鹿児島県霧島市周辺、現在の曾於市)に居住した部族とされ  
る。また 5 世紀ごろまでに大和朝廷へ臣従し、隼人として仕えたとい  
う説もある(津田左右吉ら)。なお、隼人研究家の中村明蔵は、球磨地  
方と贈於地方の考古学的異質性から、熊襲の本拠は、都城地方や贈於  
地方のみであり、「クマ」は勇猛さを意味する美称であるとの説を唱  
えている。

また、魏志倭人伝中の狗奴国をクマソの国であるとする説が、内藤  
湖南、津田左右吉、井上光貞らにより唱えられている。

上記引用における熊襲の位置はほぼ南九州である。

景行天皇紀には、景行天皇によるものと日本武尊によるものの 2 つ  
の熊襲征討が書かれている。記事から判断して、日本武尊によるもの  
が先に行われたとした。景行天皇によるもので、阿蘇周辺の熊襲が完  
全征伐された。上記 Wiki「熊襲」の状況はこの辺りと思う。九州中

南部の支配していない国々を熊襲と呼んでいたと考える。なお、九州南部の征討は奈良時代以降となる。

九州を東西に横断する JR 路線は、九大本線と豊肥本線である。九大本線は、福岡県側は遠賀川に沿って走っている。日田辺りから、北へ山国側が流れている。豊肥本線は、海岸部を除き、熊本県側は菊池川、大分県側は大野川に沿って走っている。

上で述べた、北九州は、筑後川以北、青の洞門のある山国川以西と考えている。宇佐までかもしれない。国東を、くにさき、と読むのはこの頃のことであろうか。

日本書紀に書かれている古代の戦闘に海戦が現れて(見つけて)いない。これから、圧倒的な船舶と海戦兵力をもっていたと思われる。この時点での倭軍は海兵隊的なものであったと考える。

奴国のあったとされる福岡からは、鹿児島本線が南に延びている。国道 3 号線や九州新幹線もこのルートである。これに沿った征服を行うには、陸軍の整備が必要となる。このルートで山越えした所に、福岡県の久留米市と佐賀県の鳥栖市がある。鳥栖の西の神埼市には吉野ヶ里遺跡、久留米市には高良大社がある。後者は、六国史の最後の日本三代実録では、従一位に叙せられている。正一位 12 社従一位

10社である。神社に関しては Part V で考察する。

300年頃には、遠賀川-山国川 から 菊池川-大野川 にいたと考えている。この分水嶺になるのか九重連山である。

日本武尊の征討は、この九重連峰から祖母山あたり、阿蘇山の外輪山のうち、東側から南側ではないかと想っている。

なお、九重連山の東側には竹田市、祖母山の南には高千穂町がある。

この後、阿蘇以南、球磨川流域 の征討が景行天皇によるものと考ええる。宮崎県から熊本県南部が対象と考える。

唐津を流れる松浦川の上流には鶺殿石窟仏があり、大野川沿いと大分市・国東半島には、菅尾石仏・白杵石仏に代表される石窟仏・摩崖仏が多数存在する。これらの考察は本稿の執筆のきっかけとなったものである。また、菊池川流域には装飾古墳の存在が知られている。これらは何か関連が有ると思っているが、現状では、これらを考慮する余裕はないので、知らないふりをしておく。

日本武尊が熊襲討伐の後に、制圧したものとして次が挙げられている。



日本書紀 吉備の穴濟の神、難波の柏濟の神

古事記 山の神、河の神、穴戸の神を平定し、出雲建を殺した

日本武尊の次の話は、焼津の地名となった草薙劍で火攻めを防いだ話である。中九州から駿河へ転戦することは疑問を抱いていた。焼津辺りは草原のイメージはわからない。九州近辺で草原のイメージがあるのは、阿蘇山麓と周防のカルスト台地である。

次は、上総に渡るときに海が荒れ、鎮めるために弟橘媛が入水した話である。これは豊予海峡を渡り、伊予(四国)に往く話とならないか。四国の東端が阿波で千葉県南端が安房というのは単なる語呂合わせか。

日本武尊の最後の話は、伊吹山の神の怒りに触れ、病で亡くなる話である。伊吹山も目立つ山ではあるが、山容としては近江富士と称されている三上山が挙げられる。中国地方でふさわしい山としては大山が挙げられる。西には出雲があり、中国山地は鉱物資源も豊富である。出雲との戦いで戦死したのではないかということも考えられる。

死後白鳥になったとされている。その白鳥の飛行ルートは

日本書紀：能褒野→大和琴弾原(御所市)→河内古市(羽曳野市)

古事記：伊勢→河内の国志幾

である。

摂政について考える。Wiki「摂政」では次のことが書かれている。

前近代： 一般には、日本史上における摂政とは天皇の勅令を受けて天皇に代わって政務を執ることまたその者の職であると定義される。日本書紀によると推古天皇の時の厩戸皇子(聖徳太子)が摂政となったとされており、これが日本史上における摂政の最初である。日本書紀の中で神功皇后が執政した時期は神功皇后摂政紀と呼ばれているが、これは同皇后紀を呼ぶ場合の便宜的な呼称であり、摂政という用語は神功皇后紀の本文中には登場しない。

この後、皇族としては、中大兄皇子・草壁皇子が摂政となった。

Wiki「摂政」のように、古代と平安時代の摂政を統一的に見ることは、そぐわない気がする。三国志にあるように 有男弟佐治國 自爲王 以來 少有見者 以婢千人自侍 唯有男子一人給飲食 傳辭出入 という状態であったかもしれない。この状態を摂政と呼んだとも言えるのではないか。

この他に、古事記に書かれているという、大碓命と小碓命(日本武

尊)の話は、王朝(倭の主権)争いがあったことを物語るというと考ええる。日本武尊と景行天皇の争いも同様であったかもしれない。この抗争は景行天皇の勝利となった。両者の関係者(親族、家臣団)がいるため、片方を抹殺できなかったのではないかと考える。

抗争は王権争いと政治路線の選択によるものであろう。九州を固め朝鮮を維持する派と東を目指す派の抗争が考えられる。政治路線としては、東征と朝鮮の故地の維持が考えられる。中国の王朝から、爵位を授けられることは、両者にとってメリットがあるはずである。

これらから、今の段階でのイメージは

三国志	晋書	宋書
天照大御神	崇神紀と応神記の間	応神(=崇神=神武)天皇
卑弥呼→台与→壹与	日本武尊 景行天皇	?
朝鮮半島→玄閼仇沿岸	中九州・周防灘沿岸	東征・東遷

である。

この章の最後に、数字遊びをしてみよう。各天皇紀にある4年以上の空白期間を次に示す。

在位年数； 4 年以上の空白期間， 合計； 在位年数 - 空白期間

崇神天皇紀： 68； 13-16(4), 18-47(30), 49-59(11), 計 45；	23
垂仁天皇紀： 99； 8-14(7), 16-22(7), 40-86(37), 91-98 (8), 計 59；	40
景行天皇紀： 60； 4-11(8), 14-16(5), 21-24(4), 29-39(11), 41-50(10), 計 38；	22
成務天皇紀： 60； 6-47(42), 49-59(11), 計 53	7
仲哀天皇紀： 0, 9；	9
神功皇后紀： 69； 6-12(7), 14-38(25), 57-61(5), 計 37；	32

在位年数 - 空白期間の合計は 133 となる。九州に移住したと思われる年 250 に 133 を加えれば、383 となり、ほぼ五王の時代となる。

## 10. 宋書(南北朝)の時代 倭の五王

### 序

ここで扱うのは、正史に書かれた倭の五王である。東アジアの状況は次の 図 宋書の世界 である。南北朝の境界はその力関係により、黄河と揚子江の間で変遷している。



図 IV01 宋書の世界

正史では、各王朝の書七書と、南北朝時代と隋の通史として南史・北史がある。このうち、陳書・北齊書には夷蛮列伝はなく、魏書・周

書では倭(人)条がなく、倭(人)条があるのは宋書・南齊書・梁書・である。宋書・南齊書は倭ではなく倭国となっている。南史・北史には隋まで扱っているが、ここでは除外した。

宋書では倭の五王が書かれている。卑弥呼・壺与に続いて名前が記されている倭王で、部分的な系譜も書かれている。しかし、倭の五王に関しては、卑弥呼や邪馬台国と比べて興味を持っている人は少ないようだ。

## 10.1. 倭王の求めた爵位

宋書では、倭王珍は

使持節都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭國王  
を求めた。この要求は倭王武まで続けられ、

使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王  
が授けられた。最終的には、梁により

使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事征東大將軍倭王  
に叙された。ここで、上記爵位について調べておく。

將軍から始める。

「將軍号一覧」 <http://siva.s4l.xrea.com/soshiki/syogungou.htm> では、  
漢の將軍の順位は

大將軍→驃騎將軍→左車騎將軍→右車騎將軍→衛將軍  
→征○將軍→鎮○將軍→安○將軍→平○將軍  
(→左右前後將軍→征虜將軍→・・・→輔國將軍)

ということである。宋書などでは

驃騎將軍→車騎將軍→衛將軍→征○將軍→鎮○將軍  
→安○將軍→平○將軍

で各々に、將軍と大將軍がおかれたようである。

この他に「ていーえすのメモ帳」三国志はじめての官職：将軍その3

<https://t-s.hatenablog.com/entry/20160125/1453649684>

では、晋書卷二十四職官志、宋書卷三十九百官志上、後漢書志第二十四百官志一などから次のような将軍の解説的記事がある。

大將軍などの四將軍、前後左右將軍以外の將軍としては、四征將軍、四鎮將軍、四安將軍、四平將軍がまず挙げられる。以前書いたように、これらの將軍は漢代においては他の將軍たちと同等の地位であったが、黄初中すなわち曹丕が魏の皇帝に即位してから三公に次ぐという高い地位になったのだそうだ。それ以外の將軍は基本的に雑号將軍と呼ばれる。ただし、度遼將軍、輔国將軍、輔漢將軍、護軍將軍など、一部は特殊な地位や特別な任務・職掌を持っていたようなので、どれもこれも全てが量産品の將軍というわけでもないことには注意。

三国志の將軍位

[https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question\\_detail/q12101526397](https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12101526397)

三国時代の將軍号

<http://kanshigyoku.client.jp/syogun-gou.htm>

にも一覧がある。

以下は出典は記録してないが、Web の記事から得たものである。文



章から、Wikipedia の記事を抜粋引用したものと思われる。

開府は、本来は、庁舎を設置することを許されたものであろう。儀同三司は、三公と同等の待遇を受けるものの礼遇を受けることを認められたものを指す。

三公は、中国およびその影響を受けた東アジア諸国の前近代の官制において、最高位に位置する3つの官職をいう。その起源は周王朝に始まるといわれる。周においては、太師、太傅、太保の3官職が三公と呼ばれていた。秦や前漢では行政を司る丞相(大司徒)、軍事を司る太尉(大司馬)、監察・政策立案を司る御史大夫(大司空)の3官が三公と呼ばれ、後漢以降は司徒、太尉、司空と名を改められた。

漢においては前漢の平帝の元始元年(1年)、幼くして王莽らに擁立されて即位した平帝の補佐と教育のため太師、太傅、太保が置かれた。金印紫綬で、地位は大司馬、大司徒、大司空の三公より高く、太師は太師、太傅、太保の中で最も高位であった。

晋において再度太師、太傅、太保を置いたが、師が景帝司馬師の諱であることから避けて太師を太宰と称した。北魏では太師、太傅、太

保を三師と呼んでいる。

使持節というのは皇帝から軍政権を渡された官でその象徴として節が与えられた。軍政の代わりに全権と書かれているものもあるが軍制が布かれた以外の地では差は少ないかもしれない。使持節・持節・假節の三階級があった。

都督は三国時代に設置され、本来は監督、統轄の意味で、軍司令官のことをいったが、複数の州に跨る管轄領域を持った都督は長官である刺史を兼ね、都督府を置いて府官を任じ軍事だけでなく民政をも掌握する様になった。都督諸軍事、監諸軍事、督諸軍事の三階級があった。

大將軍、古代中国における各將軍の最上位者を意味する官職である。前漢では当初非常置の職で、武帝による積極的な対外政策が開始されると、常置の官職となった。三国時代以降も大將軍の職は存在したが、名誉職としての色合いが強まっていった。

驃騎將軍は、前漢以降の官職名。軍を率いる將軍位の一つ。票騎將軍と記述されることもある。前漢の武帝元狩2年 BC121 に霍去病が

就任したことに始まり、元狩 4 年 BC119 には大將軍と同等の秩祿とされた。曹魏では二品官であった。蜀の末期には、胡濟なる武官を右驃騎將軍に任じている。驃騎將軍と併置された官であるか不明である。北魏では一品官となった。

隋代には驃騎府・車騎府が府兵制の中核となったため、驃騎將軍は驃騎府の指揮官として府兵を率いた。大業 3 年には驃騎府・車騎府が統合され鷹揚府となり、府の指揮官は鷹揚郎將となった。唐に入ると驃騎府・車騎府が復活したが、貞觀年間に再び折衝府に統合され、府の指揮官は折衝都尉となった。

職名としての驃騎將軍は消滅したが、唐から明に至るまで武官の散官の名称として残り続けた。特に唐宋では驃騎大將軍は武散官の筆頭であった。

倭に関しては、讚には、永初二年 421 に可賜除授とあるが何が与えられたかは記されていない。元嘉十五年 438 に弟の珍に 安東將軍倭國王 が授けられた。最終的 502 には武に 使持節督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事征東大將軍倭王 が与えられた。

高句麗は、故国原王二十五年 355 に燕より 征東大將軍營州刺史樂

浪公王 を得た。東夷の国が大將軍を授けられた初めての例か。營州刺史は内郡の官職である。長壽王二十三年 438 には宋の世祖孝武皇帝より 都督遼海諸軍事征東將軍領護東夷中郎將遼東郡開國公高句麗王 を授けられた。さらに、長壽王五十一年 466 には 車騎大將軍開府儀同三司 を追贈され、太祖建元元年 479 には 驃騎大將軍 に進められた。驃騎大將軍は將軍の最高位である。

百濟は、咸安二年 372 に百濟王餘句が 鎮東將軍 となった。腆支王十二年 416 に東晋より 使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王 に封じられた。この時点では、倭より上位である。

新羅は眞興王二十六年 565 に北齊の武成皇帝より 使持節東夷校尉樂浪郡公新羅王 を授けられたのが初めてである。

ここで、倭の朝貢の主なものを振り返ってみる。

### 後漢光武帝時

三国魏の最初の朝貢の景初二年 238 は司馬懿により公孫氏が滅ぼされた年である。この記事は晋書でも、宣帝が公孫氏を平定したとき、

倭国の女王が帯方に使いを遣り朝見した、と書かれている。

宋では建国2年目である。

南齊の建元元年479、梁の梁武帝即位

である。三国魏への朝貢は司馬氏への朝貢とすれば、晋と南朝の宋・南齊・梁と朝貢している。しかも、建国早々に行っている。これは、大陸の情報が伝わっていたことを示している。

北朝への朝貢が無いのは、間に強力な高句麗があったためと考えられるが、海路で行く場合、港は南朝系の王朝が支配していたのではないかと考えられる。

## 10.2. 正史(宋書)の記事

Wiki「宋書」では次の説明がある。

宋書は、中国南朝の宋について書かれた歴史書。宋・齊・梁に仕えた沈約 441-513 が齊の武帝に命ぜられて編纂した。宋代のうちに何承天、山謙之、蘇宝生、徐爰らが宋書を書いており、沈約はそれらを元に作業することができた。本紀・列伝は1年ほどで完成したが、志の完成には10年の歳月がかかり、完成は梁代に入ってからになる。宋が滅亡 479 して間もない、まだ多くの関係者が存命の時代に編纂されたために同時代資料を多く収録しており、資料的価値は高い。

日本については夷蛮伝の記述の中に、倭の五王と呼ばれる日本の支配者から朝貢が行われたことが記されており、この時代の日本の貴重な資料となっている。

この宋の前に晋王朝があり、3.1 節で晋書の記事を取りあげた。以下暫くは重ねて引用することになる。

晋書四夷傳の記年記事は

宣帝之平公孫氏 238 也 其女王遣使至帶方朝見 其後貢聘不絶 及文帝  
作相 又數至 泰始初 265 遣使重譯入貢

宣帝が公孫氏を平定したとき、倭国の女王が帯方に使いを遣り朝見した。その後続けて貢聘した。文帝が宰相になった時とその後数回朝貢した。

のみであり泰始初年の記事は書かれていない。宣帝が公孫淵を討伐したのは 238 年である。

317 年以降は華北は北方民族に支配された。

安帝紀に

義熙九年 413 高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物

高句麗、倭國と西南夷の銅頭大師が方物を献上した。

という記事がある。

同様のことは百済でも見た。四夷傳では三韓が扱われていて、百済の朝貢は東晋簡文帝紀に書かれている。

晋書の著者は、宣帝之平公孫氏から泰始初年にかけて朝貢した女王の倭と安帝義熙九年に朝貢した倭が同じ国という認識はなかったのかもしれない。使者が倭の女王の後継と言わなかったのではないかということも考えられる。

泰始初年までの倭を魏倭、安帝義熙九年に朝貢した倭を宋倭と呼ぶことがある。

倭条における倭の五王の最初の記事は、南史の

### 晉安帝時 396-418 有倭王贊遣使朝貢

晉の安帝の時代に倭王の贊が朝貢の使いを送った。

である。前出の安帝紀の 義熙九年 413 高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物 と同じとすれば、南史の記事は 413 年となる。晋では倭に関心が薄かったということであろうか。

このとき、百済は

**義熙十二年 416 以百濟王餘映為使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王**  
百濟王の餘映を使持節都督百濟諸軍事鎮東將軍百濟王とした。

の叙勲を受けている。餘映は 18 代腆支王 405-420 である。鎮東將軍は倭王が始めて得た將軍位の安東將軍より大將軍を除けば 1 階級上である。この記事と応神天皇廿五年の記事から、作業仮説 I12「応神天皇廿五年は百済の腆支王十六年で、420 年である。元年は 396 年となる。」を得た。



晋書安帝紀義熙九年 413 の記事と晋書泰始初年 265 の記事とは 158 年の差がある。魏倭と宋倭が継続していれば、1 代平均 20 年程度とすれば、8 代程となる。

作業仮説 I10 の神功皇后元年 201 と I12 の応神天皇元年 396 との差は 186 年となる。神功皇后の崩御年を神功皇后六十九年 269 とすれば、127 年のギャップが生じることは、3.3 節で述べた

続いて宋書の記事をみていく。

### 高祖永初二年 421 詔曰 倭讚萬里修貢 遠誠宜甄 可賜除授

倭国の王、讚は、万里の遠きより貢ぎ物をおさめている。その遠距離をみるとわぬ誠意は高く評価してよろしい。ゆえに官職を授ける。(倭国伝)

可賜除授とだけ書かれ、爵位が書かれていない。

梁書ではやや簡略化しかたちで書かれている。

永初は宋の初代高祖の始めの年号であり、高句麗・百済は高祖の即位した 420 年に(祝賀の)朝貢をしていることになる。1 年ずれていることは、この時の倭は日本列島にあったことの傍証になり得る。

宋は山東半島を領有している。百済は京城辺りから山東半島に船で行くことも可能であったと思われる。(前百済は海辺)百済と晋書での馬韓は相当回数朝貢していることから、この時代、朝鮮半島より山東半島へは安全となったと考えられる。

### 太祖元嘉二年 425 讚又遣司馬曹達奉表獻方物

倭王讚は、司馬の曹達に使者を遣わし、上表文を奉り、倭の産物を献上してきた。(倭国伝)

Wiki「曹達(倭)」では

倭王讚の臣。中国系渡来人と推測される。

冠称の司馬については、軍事に関する官職名を指すとする説が有力視される。倭王讚は永初2年421に除授を賜っているが、その内容は不明ながら安東將軍倭国王の官爵号の可能性が高い。そしてこの官爵により、將軍府(軍府/幕府)の設置および長史(文官管掌職)・司馬(軍事管掌職)・參軍といった僚属(府官)の設置が可能となっており、曹達の司馬もその府官制に則った官職と推測される。倭の司馬(次官)の遣使は、高句麗・百済の長史(長官)の遣使とは異なるものであり、軍事性を重視する倭の内情や、他国より優位に立とうとする

倭の外交姿勢を表す可能性が指摘される。一方で大將軍府(高句麗・百濟)では長史が筆頭で、將軍府(倭)では司馬が筆頭であったとする見方もある。ただし当時の曹達の実際は、軍官の実務に従事する職(実司馬)でなく、使節のための臨時的な職(虚司馬)であったと見られる。なお、この司馬を姓とする異説もある。

この記事には次が続いている。

**讚死 弟珍立 遣使貢獻 自稱使持節 都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事 安東大將軍 倭國王 表求除正 詔除安東將軍 倭國王 珍又求除正倭隋等十三人平西 征虜 冠軍 輔國將軍號 詔並聽**

讚が死に、その弟の珍が後を継いだ。そして使者を派遣して貢ぎ物をたてまつった。自分で使持節・都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事・安東大將軍・倭國王と称しており、珍は上表文をたてまつって正式にこの官職に任命されるよう求めた。そこで、安東大將軍・倭國王に任命する詔を出した。珍はまた、自分の臣下の倭の隋ら十三人に、平西・征虜・冠軍・輔國などの將軍號を正式に授けるよう求めてきた。文帝は詔を下してすべて許可した。(倭国伝)

この記事の爵位については既に取りあげた。年が書かれていないが、元嘉二年 425 は讚とあるので、違う年と考える。

倭王は百濟と同程度の官位を求めたのであろう。都督が認められなかったのは何故だろうか。宋にとっては倭がどの程度の勢力下把握していなかったと考える。倭の王とすることは問題がなく、とりあえず、支配は倭のみで他への影響があまりないと思われる安東將軍の叙位にとどまったのではないか。

宋書文帝本紀に次の記事がある。

**元嘉七年 430 倭國王遣使獻方物** 倭國王使いを送り献上してきた。

これにも王名が記されていないが、前後の文より珍とする。

**元嘉十五年 438 以倭國王珍為安東將軍**

倭國王珍を安東將軍とした。

**元嘉二十年 443 是歲 河西國 高麗國 百濟國 倭國並遣使獻方物**

この年、河西國・高麗國・百濟國・倭國が使いを送り献上してきた。

夷蛮列伝では

**元嘉二十年 443 倭國王濟遣使奉獻 復以為安東將軍 倭國王**

倭國王の濟は、使者を派遣して貢ぎ物をたてまつった。そこでまた、安東將軍倭國王に任命した。(倭国伝)

前2王と同じ 安東將軍 倭國王 が授けられた。

**元嘉二十八年 451 加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事  
安東將軍如故 并除所上二十三人軍 郡**

倭國王濟に、使持節・都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事の官職を加え、安東將軍はもとの通りとした。ならびに上奏された二十三人を將軍や郡長官に任命した。(倭国伝)

**文帝紀元嘉二十八年 451 安東將軍倭王倭濟進號安東大將軍**

安東將軍倭王の倭濟を安東大將軍に進めた。

ここでは、倭濟 と倭を姓のように書いている。

倭國王濟が朝貢したが使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事 が加えられた。これは珍が望んだものとの差は、百濟が除かれて加羅が加えられていることと、大將軍ではなく將軍に留まっているのである。百濟も宋に朝貢していたことから、百濟が省かれたとされている。これは当然のことであろう。これ以外は大が落ちただけでほ

ば希望を認められたことになる。

ここでやっと百済の腆支王並みになったということである。

425 年からは 25 年程たち、何回かの朝貢も行われている。百済は相当朝貢していたはずである。

元嘉二十八年の記事に続き次が記されている。

### 濟死 世子興遣使貢獻

濟が死に、世子の興が使いを送り貢獻してきた。

孝武帝本紀に

世祖大明四年 460 倭國遣使獻方物	倭國が使いを送り献上してきた。
六年 以倭國王世子興為安東將軍	倭國王の世子興を安東將軍とした。

の記事がある。

世祖大明六年 462 詔曰 倭王世子興 奕世載忠 作藩外海 稟化寧境 恭修貢職 新嗣邊業 宜授爵號 可安東將軍 倭國王

倭王の嗣子の興は、代々重ねてきた中国への忠節を大切にし、外海に藩屏となり、中国の感化をうけて辺境を安らかにし、うやうやしく貢ぎ物をもって来

朝した。興は新たにその遠い地を治める仕事を嗣いだのだから、爵号を授けて、安東將軍・倭國王とせよ。(倭国伝)

日本書紀の次の記事が対応する。

**雄略天皇六年 461 吳國遣使貢獻**      吳國に使いを遣り貢獻した。

これを作業仮説としておく。吳国は、三国時代の吳の後継という意味で南朝の王朝を吳とよんだと考えた。ただし、仁徳天皇紀五十八年に吳國 高麗國並朝貢という記事があり、吳国については検討を要する。

**作業仮説 IV01.** 雄略天皇六年は 462 年であり、雄略天皇元年は 457 年である。

**興死 弟武立 自稱使持節 都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事 安東大將軍 倭國王**

興が死んで、弟の武が倭王となった。自分で、使持節・都督倭百濟新羅任那加羅秦韓慕韓七國諸軍事・安東大將軍・倭國王 と称していた。(倭国伝)

宋書順帝本紀には

**順帝昇明元年 477 倭國遣使獻方物** 倭國が使いを送り献上してきた。

**順帝昇明二年 478 倭國王武遣使獻方物 以武為安東大將軍**

倭國王の武は使いを送り献上してきた。武を安東大將軍とした。

夷蛮列伝では

**順帝昇明二年 478 遣使上表曰**

順帝の昇明二年に倭王武は使者を遣わして上表文をたてまつって言った。

(倭国伝)

以下はよく知られている武の上奏文である。全文は長いので部分的・断片的に引用する。訳は「倭国伝」のものである。

**東征毛人五十五國 西服衆夷六十六國 渡平海北九十五國**

東方では毛人の五十五カ国を征服し、西方では衆夷の六十六カ国を服属させ、海を渡っては北の九十五カ国を平定した。

**道逕百濟 裝治船舫**

道は百濟を經由しようとして船の準備も行った。

**而句驪無道 圖欲見吞 掠抄邊隸 虔劉不已 每致稽滯 以失良風**



ところが高句麗は無体にも、百済を併呑しようと考え、国境の人民をかすめとらえ、殺害して、やめようとしな。中国へ入朝する途は高句麗のため滞ってままならず、中国に忠誠をつくす美風を失わされた。

**奄喪父兄 使垂成之功 不獲一簣 居在諒闇 不動兵甲 是以偃息未捷**

父と兄の喪中は、軍隊を動かさず、兵を休めていたので未だ高句麗に勝っていない。

**若以帝德覆載 摧此強敵 克靖方難 無替前功 竊自假開府儀同三司  
其餘咸各假授 以勸忠節**

もし中国の皇帝の徳をもって我らをかばい支えられるなら、この強敵高句麗を打ち破り、地方の乱れをしずめて、かつての功業に見劣りすることはないだろう。勝手ながら自分に、開府儀同三司を帶方郡を介して任命され、部下の諸将にもみなそれぞれ官爵を郡に介して授けいただき、依って私が中国に忠節をはげんでいる。

高句麗の無体を訴えている。478年の高句麗王は第20代長寿王で在位は416年から491年であり、その前は有名な第19代好太王で在位は391年から412年である。好太王は好戦的で朝貢はないが、長寿王は中国には友好的な王である。

このとき認められたのは

**詔除武使持節 都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事 安東大將軍  
倭王**

そこで順帝は詔をくだして武を、使持節・都督倭新羅任那加羅秦慕韓六國諸  
軍事・安東大將軍・倭王に任命した。(倭国伝)

で、ここまでが昇明二年 478 の上奏文である。宋は 479 年に滅びた。  
南斉書では

**建元元年 479 進新除使持節 都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓  
六國諸軍事 安東大將軍 倭王武號爲鎮東大將軍**

使持節 都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事 安東大將軍 倭王  
武を鎮東大將軍に昇進させた。

建元は南斉の最初の元号。建元元年は南斉の始めの年号である。倭  
国条の前に加羅国条があり、

**建元元年 479 國王荷知使來獻 詔曰**                      國王荷知の使いが來獻した。

と書かれている。倭と加羅と一緒に朝貢したと思われる。

梁書では

**晉安帝時 397-418 有倭王贊 贊死 立弟彌 彌死 立子濟 濟死 立子興  
興死 立弟武**

晋の安帝の時、倭王の贊がいた。贊が死に弟の彌が立った。彌が死に子の濟が立った。濟が死んで子の興が立った。興が死んで弟の武が立った。

**齊建元中 479-482 除武持節 督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事  
鎮東大將軍 高祖即位 進武號征東將軍**

武を使持節 都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事 鎮東大將軍 倭王に除した。高祖の即位の時には征東將軍に昇進させた。

南史では齊建元中の記事の最後が

**梁武帝即位 502 進武號征東大將軍**

梁の武帝が即位した。武を征東大將軍に進めた。

となっている。將軍位に関しては

平東 < 安東 < 鎮東 < 征東 < 車騎 < 驃騎

の順位がある。各將軍位には大將軍が上位にある。また、東だけ挙げ

たが、他の方位の将軍もある。

梁書武帝本紀では

天監元年 502 車騎將軍高句驪王高雲進號車騎大將軍 鎮東大將軍百  
濟王餘大進號征東大將軍 鎮東大將軍倭王武進號征東大將軍

訳の必要はないであろう。

とある。武は五王の最後の王である。餘大に関しては、502年での百  
濟の王は第25代武寧王 502-523 であるが、漢風諱は隆である。1代前  
の第24代東城王 479-501 の漢風諱は牟大である。

將軍位としては、高句麗 > 百濟 = 倭 となった。

Wiki「倭の五王」にはこれらの朝貢の一覧表が書かれている。この  
表は、ほぼ満足のいくものである。まず、この表を簡略化したものを  
次表とする。

表 IV401 五王の朝貢

王名	王朝	年	官位など
讚	晋	義熙九	413 高句麗 倭國及西南夷銅頭大師並獻方物
讚	宋	永初二	421 詔曰 倭讚萬里修貢 遠誠宜甄 可賜除授
讚	宋	元嘉二	425 讚又遣司馬曹達奉表獻方物
珍	宋	元嘉七	430 倭國王遣使獻方物
珍	宋	元嘉十五	438 以倭國王珍為安東將軍
濟	宋	元嘉二十	443 安東將軍倭王
濟	宋	元嘉二十八	451 使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍倭王
濟	宋	元嘉二十八	451 安東大將軍倭王
興	宋		? 濟死 世子興遣使貢獻
興	宋	大明四	460 倭國遣使獻方物
興	宋	大明六	462 以倭國王世子興為安東將軍
武			興死 弟武立 自稱 . . .
?	宋	昇明元	477 倭國遣使獻方物
武	宋	昇明二	478 以武為安東大將軍
武	宋	昇明二	478 使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東大將軍倭王
武	南齊	建元元	479 使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事鎮東大將軍倭王
武	梁	天監元	502 進武號征東大將軍

このあと次の 600 年まで朝貢は行われなかった。

開皇二十年 600 倭王姓阿每 字多利思北孤 號阿輩?彌 遣使詣闕 . . .

高祖曰：「此太無義理」於是訓令改之

倭王で姓は阿每、字は多利思北孤、阿輩?彌と号している者が、

隋の都の大興に使者を派遣してきた。・・・高祖文帝は、

それははなはだ道理のないことだ、と言って、倭国を諭してこれを改めさせた。

(倭国伝)

### 10.3 五王の系譜と天皇

宋書から得られる五王の系譜は

贊 → (弟) 珍、 濟 → (子) 興 → (弟) 武

であり、これが定説と思われる。南齊書・梁書からは

贊 → (弟) 彌 → (子) 濟 → (子) 興 → (弟) 武

が得られる。

Wiki「南齊書」では、

南齊書は、中国南朝の齊 479-502 について書かれた歴史書。梁の蕭子顯が書いた紀伝体の史書

Wiki「梁書」では

南朝梁 502-557 の歴史を記した歴史書。56 巻。629 年(貞観 3 年)に、陳の姚察の遺志を継いで、その息子の姚思廉が成立させた。と書かれている。両書とも滅亡後数十年の間に書かれている。

五王を日本書紀に書かれている天皇の誰かと考えるのは自然である。しかし、倭の王家と天皇家の関係は正史には書かれていない。これは、使節が中国の官吏の問いに十分に答えられなかったことによ

ると考えている。答えられなかったのか、答えたくなかったのかはわからない。同じように、日本書紀でも、触れられないのか触れたくないのかはわからないが、五王に関しては全く触れていない。五王の系統は日本書紀編纂時の天皇にいたる皇統とは別であったのではないかと考えられる。

手懸りは、これまでも引用した記事 雄略天皇六年 462 吳國遣使 貢獻 と八年の記事、および百済・新羅関連の記事と考えている。

とにかく、天皇に比定することを考えていこう。定説があるかどうかかわからないので、Wiki「倭の五王」を当たってみる。

最も蓋然性が高いものが雄略天皇を武とする説である。先代の安康天皇は雄略の兄であり、先々代の允恭天皇は安康・雄略の父であることから、済の子が興でありその弟が武であると記す宋書の系譜とも一致する。また、478年に武が奉った上表文では「にわかには父兄を喪い」（奄喪父兄）と述べられており、允恭の死後に跡を継いだ安康がわずか3年で暗殺されたという記紀の記述とも整合性がある。以上のように済・興・武については研究者の間でおおむね一致を見ているが、讚と珍については宋書と記紀の伝承に食い違いがあるため、



様々な説がある。

と書かれている。武は 478 年と 502 年に朝貢していること、雄略天皇六年 461 吳國遣使貢獻、雄略天皇の在位期間は 456 年から 479 年であることと整合するか疑問である。「空企画」では、478 年から 502 年の間在位していた天皇はいない。

これらから、五王と天皇とを系譜まで含めて一致させることは不可能と思われる。

Wiki「倭の五王」では幾つかの興味ある説が書かれていた。

珍と彌とは別人と見て、実際には倭の六王とする説

倭の五王はヤマト王権とは別の国の王とする説

この他に、中国風の一字名をもった倭王は他にもいたという説、という項があったが、現在は削除されている。これらの説は日本書紀以外で得られたものと思われる。

倭の五王の最後の朝貢は 502 年である。500 年以前の王で、中国の正史に現れ、各国の正史の王と対応の付くものをみると、高句麗では宮以降の殆どの王が対応している。百済に関しては凡そ半分程度が

対応している。新羅は初出が521年である。

倭に関しては、まず、不完全であるが、注というかたちで卑弥呼が挙げられる。これから、作業仮説 I10 を得た。

次は、

世祖大明六年 462 詔曰 倭王世子興 . . .

雄略天皇六年 461 吳國遣使貢獻

の対応で、これより作業仮説 IV01 を得た。

また、注と百済本記の記事から、作業仮説 I12 を得た。

2 匹目のドジョウを求めて、応神天皇以降、継体天皇までの百済関係の記事を抜き出してみる。これが、表 IV02「紀に現れる百済の王」である。

## 表 IV02 紀に現れる百済の王

神功皇后47年 247	百済王亦遣久氏朝貢	
神功皇后51年 251	百済王亦遣久氏朝貢	
神功皇后55年 255	百済肖古王薨	肖古王 238-286 (166-214) 近肖古王 346-375 句
神功皇后56年 256	百済王子貴須立爲王	仇首王 286-306 (214-234)
神功皇后64年 264	百済國貴須王薨 王子枕流王立爲王	近仇首王 375-384 須
神功皇后65年 265	百済枕流王薨 王子阿花 年少 叔父辰斯奪立爲王	枕流王 384-385
應神天皇3年 398(272)	百済辰斯王立	辰斯王 385-392 ? 暉
應神天皇8年 403(277)	(百済記云 阿花王立)	
應神天皇15年 410(285)	百済王遣阿直岐	
應神天皇16年 411(286)	百済阿花王薨405	阿花王 392-405 ? 暉
應神天皇25年 420(294)	百済直支王薨420 即子久爾辛立爲王	腆支王 405-420 映 久爾辛王 420-427
應神天皇39年 435(298)	百済直支王 遣其妹 . . .	(毗有王 427-455)
雄略天皇2年 458(462)	百済新撰云 己巳年 蓋鹵王立	蓋鹵王 455-475 慶
雄略天皇5年 461	百済加須利君(盖鹵王也)	
雄略天皇6年 462	吳國遣使貢獻	文周王 475-475
雄略天皇23年 479	百済文斤王薨	三斤王 477-479
武烈天皇4年	百済末多王無道 國人遂除 而立嶋王 是爲武寧王	東城王 479-501 武寧王 502-523
繼體天皇7年	百済太子淳陀薨	
繼體天皇17年	百済國王武寧薨	
繼體天皇18年	百済太子明即位	明は聖王 523-554

この表から、次の作業仮説をおく。

作業仮説 IV02. 武烈天皇四年は 502 年、元年は 499 年である。

作業仮説 IV03. 継体天皇十七年は 523 年、元年は 507 年である。

現段階での東遷のイメージを示す。

三国志 3C	卑弥呼→臺與	朝鮮半島→玄界灘沿岸	邪馬台
晋書 4C	伊予→？	周防灘沿岸	
	日本武尊 景行天皇	中九州	
宋書 5C	五王	吉備王朝 阿波(淡路)王朝 河内王朝・明日香王朝	東征 東遷
隋書 6C	推古天皇・聖徳太子	飛鳥王朝	

ここで 加使持節都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事 を再び考える。断片的に考えたことの纏めとなるかもしれない。

すぐ浮かぶ疑問は、過去にわたって南朝鮮の支配を主張するのは何故かということである。すぐに思いつくのは、現在の領有権だけではなく、過去も朝鮮半島南部を領有していたことを主張したいということであろう。では何故過去の領有権を主張するのであろうか。

三国志では三韓と言われているが、ここにあるのは馬韓・辰韓とみなせる秦韓・慕韓であり、弁韓(弁辰)が書かれていない。また、百濟

も主張しているが、百済が宋に朝貢していたため、加羅に替えたとのことである。加羅に関しては9.1節で考察した。

当時の日本列島では、倭王の移住以外にも、朝鮮半島からの移住者が幾つかの国を造っていたと考えられる。彼らのほとんどの出身は朝鮮半島南部であったと思われる。このとき、先祖の地である朝鮮半島南部では倭王の支配下にあったというのは心理的に受け入れやすいものであったはずである。

五王の朝貢は413年から502年までの約100年でほぼ五世紀である。一方日本書紀の完成は720年である。日本の成立の時期として考えている文武天皇の在位期間は697年から707年である。これは五王から200年後である。現在は明治維新からほぼ150年であり、時代を考慮すれば、東征に関わることは家伝としてかなり詳細に残されていても不思議ではない。

国史の編纂のために各家に伝えられている家伝などを提出させたということである。歴史を書くための資料の徴収の他に、記録がなくなればいずれは記憶も薄れていくということで、副次的に各家に伝わる家伝の抹消という政権の維持の効果があったとも考えられる。詳しくは読めていないが、各豪族の祖先の配置も大方の人の反論を

興さないように極めて巧妙に編纂されていると思われる。

倭百済新羅任那秦韓慕韓六國の軍事と行政の権限を求めたものである。

百済に換えて加羅を入れて叙位されたのは、中国の王朝にこの支配を認めさせる何等かの根拠を示すことが出来たと思われる。倭百済新羅任那が当時存在した国で、秦韓慕韓は過去に存在した国である。倭国は、朝鮮半島南部には百済・新羅・任那があるとしていたのではないか。

秦韓は辰韓で慕韓が馬韓と思われるが、何故現存でない国の支配権を要求したのか、すなわち、必要であったかは昔からいただいていた疑問点である。

倭の五王により東征が為された、を仮定すると、説明がつく。当時の日本列島には朝鮮半島からの相当数の移住民が倭国(=女王国)以外にもに住みついていたと思われる。例えば、岡山、出雲、近畿。移住は鉄資源を求めての製鉄者の集団と百済に征服された馬韓の諸国、新羅に征服された辰韓の諸国が考えられる。朝鮮半島にいた先祖がその地で属していた国の子孫であることを認めれば、現状が維持されれば、戦うことにより滅ぼされる危険を冒すよりは、属することを

選ぶほうが自然である。倭国にとっては、この官位を得ることは、戦闘せずに配下とすることが可能となる。これは朝貢のコストを払っても十分行うに値することであろう。出雲の国譲りはこの例である可能性が高い。

(アメノワカヒコ 天若日子、日女命、多伎都比古命、多紀理毘賣命、阿遲鋤高日子根神、

<http://homepage2.nifty.com/LUCKY-DRAGON/kodai-3-3-kuniyuzuri-02.htm>

{天若日子}

<http://homepage2.nifty.com/LUCKY-DRAGON/kakurega-0.htm>

{秘密の小部屋} )

478年の武の上奏文について考えてみる。

東征毛人五十五國 西服衆夷六十六國 渡平海北九十五國 が日本列島で可能なのは、すなわち、東西と北に五十以上の国があるのは、四国周辺と考えるのが妥当ではないか。この時期は邪馬壹國は四国か淡路島にあったのではないか。

これは一応総括的な文である。しかし、この時点では、東征は完了していないと考えている。

## 10.4. 五王と天皇

5 人の倭王を天皇の誰かに対応させられないかということを考える。本稿の立場からは、日本書紀に対応する文字を名前にもつ天皇が居ないということである。

天皇名については、各巻のタイトルに和風諡号と漢風諡号、各天皇紀の初めに和風諡号と漢風諡号が書かれている。神武天皇のみ和風諡号と(和風)諱となっている。なお、(漢風)諱は書かれていない。顯宗天皇・仁賢天皇・繼體天皇では、<更名・・・>が書かれている。この・・・を諱とした。

応神天皇から繼體天皇までの天皇について、漢風諡号、和風諡号、諱を表にする。他の主な天皇も加える。なお天皇は略す。諱は書かれていないことがある。推古天皇・天武天皇・持統天皇には幼名が書かれている。これは諱に相当すると考える。



表 IV03 和漢諡号と諱

漢風諡号	和風諡号	諱（更名，幼名）
神武	日本磐余彦	彦火火出見
崇神	御間城入彦五十瓊殖	
景行	足彦忍代別天皇	
神功皇后	氣長足姫尊	
應神	譽田	
仁徳	大鷦鷯	
履中	去來穗別	
反正	瑞齒別	
允恭	雄朝津間稚子宿禰	
安康	穴穗	
雄略	大泊瀬幼武	
清寧	白髮武廣國押稚日本根子	
顯宗	弘計	來目稚子
仁賢	億計	大爲
武烈	小泊瀬稚鷦鷯	
繼體	男大迹	彦太尊
欽明	天國排開廣庭天皇	
推古	豊御食炊屋姫	額田部皇女
天武	天渟中原瀛真人	大海人皇子
持統	高天原廣野姫	野讚良皇女

上記から、倭の五王の名に結び付くと思われる天皇は見つからない。

Wiki「諱」では

古代に貴人や死者を本名で呼ぶことを避ける習慣があったことか

ら、転じて人の本名(名)のことを指すようになった。本来は、名前の表記は生前は名、死後は諱と呼んで区別するが、のちには生前にさかのぼって諱と表現するなど、混同が見られるようになった。諱に対して普段人を呼ぶときに使う名称のことを、字といい、時代が下ると多くの人々が諱と字を持つようになった。

Wiki「諡(おくりな)」では

諡、あるいは諡号は、主に帝王・相国などの貴人の死後に奉る、生前の事績への評価に基づく名のことである。日本の天皇の崩御後の称号には、諡号と追号の別があり、諡号はその人の高貴さや具体的な高德を表わした美称を死後に贈るものであり、追号は宮号や陵名などを用いたものである。諡号として国風諡号・漢風諡号の2種類がある。このうち、国風諡号は日本特有のもので、和風諡号・国語諡・本朝様諡等の別称がある。

## 五王の系譜の定説

宋書の五王の系譜は

讚 → (弟) 珍、 濟 → (子) 興 → (弟) 武

と2つに分かれている。これは、倭の王朝に交替があったのではないか。少なくとも、濟の使者は宋に続柄に関して納得のいく説明ができなかったのではないか。

まず、正史の記事(表 IV01)から考察していく。朝貢年のみを表にした次表を考える。

表 IV04 五王の朝貢した年

讚			珍		濟		興			武				
413	421	425	430	438	443	451	?1	460	462	?2	477	478	479	502

(?1 と ?2 は年が不明を示す)

大明六年 462 の記事 以倭國王世子興為安東將軍 と 雄略天皇六年 の記事 吳國遣使貢獻 を対応させ、作業仮説 IV01 をえた。また、日本書紀と百濟本記の記事の対応から、作業仮説 IV12 を得た。

正史との直接の対応ということから、作業仮説 IV01 を優先する。

作業仮説 IV01 と「空企画」の雄略天皇在位期間 23 年からは、雄略

天皇の在位期間は [457, 479] となる。また、作業仮説 12 と「空企画」の応神天皇の在位期間は [396, 436] となる。

表 IV03 から、五王の在位期間を図示する。

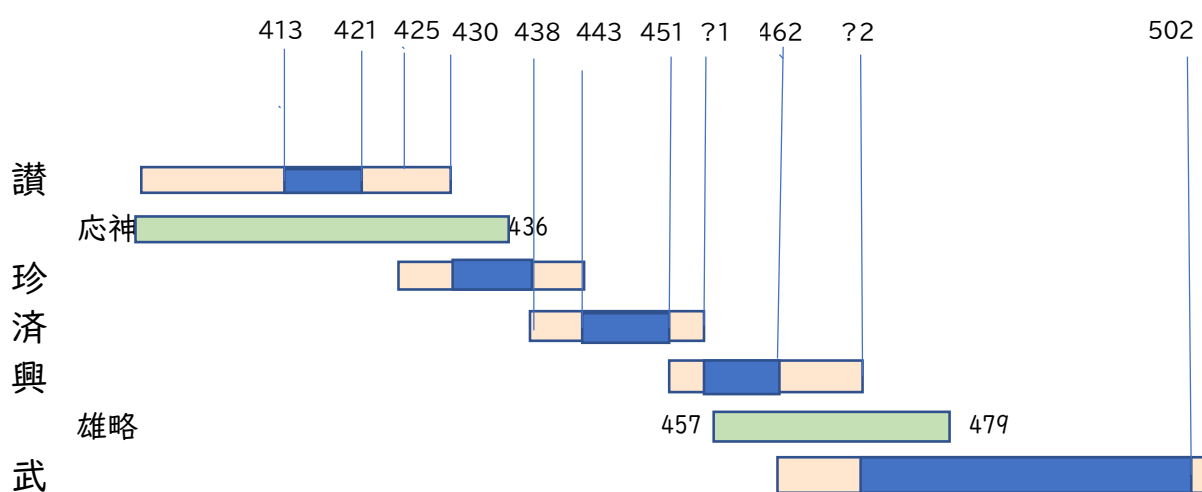


図 IV02 五王の在位期間

青の区間の両端は、各王の朝貢が正史に書かれている年の最初と最後のものである。

ここで、若干のためらいはあるが、次の作業仮説をおく。

作業仮説 IV04. 雄略天皇は宋書の倭王 興 である。

作業仮説 IV05. 讚は応神天皇である。

「ためらい」の1つは、呉の用法である。もう1つは、加上説から崇神天皇と応神天皇は重なることになる。そのここで東遷が始まったとすれば、その仮想実行者の神武天皇も重なることになり、神の付く3人の天皇が重なってくる。これから、応神天皇も仮想ではないかということである。あるいは、五王は日本書紀での天皇とは別ではないかも否定できていない。

倭の移住の前後の以外の日本列島はどんな状況か。

移住した民族が国を造った比較的新しい例として、詳細は忘れたが、梅棹忠雄が類似性を指摘した、イギリスについて調べてみた。

Wiki「イングランドの歴史」では

ケルト人がイングランドに流入してきたのは紀元前5世紀頃と見られている。ケルト人は鉄器と共にヨーロッパにやって来ており、この遺物を調査することによって彼らがいつ頃グレートブリテン島にやって来たかが判る。しかしそれ以前にイングランドにも石器時代

の存在は確認されており、ストーンヘンジなどの巨石による遺跡も残されている。これを建設した民族がどのような民族であったかはよく分かっていない。ケルト人は重量のある犁を使用して先史時代には手がつけられなかった土地を開墾し、紀元前 1 世紀にはブリテン島の総人口は 25 万人程度に達していた。

紀元前 55 年ローマのユリウス・カエサルが侵入、43 年にはローマ皇帝クラウディウスによってグレートブリテン島の大部分が占領された。

ローマ人はブリテン島で痕跡が確認されているものだけでも約 500 か所のヴィラを営み、100 か所のタウンを建設した。そして、それらを結ぶ総延長 5000 マイルを超える道路網や、カー・ダイク（英語版）のような溝渠を建設した。ローマ時代のブリテン島の総人口は 50 万人から 150 万人と諸説あり、正確な数はわからない。

Wiki「七王国」では

アングロサクソン七王国(Heptarchy)とは、中世初期にグレートブリテン島に侵入したアングロ・サクソン人が同島南部から中部にかけての地域に建国した 7 つの王国のこと。この時代をまた七王国時代とも呼ぶ。最初にこの語を記したのは 12 世紀の史家ヘンリー・オ

ブ・ハンティングドンであり、16世紀には用語として定着した。

これらの王国が覇を競った時代は、ホノリウス帝がブリタンニアを放棄してから(409年)、ウェセックスのエグバート王がカレドニアを除くブリテン島を統一するまで(825年、エランダンの戦い)であると考えられている。実際にアングロ・サクソン人が建国した王国は7つのみではなく、多数の群小のアングロ・サクソン人および先住のブリトン人の小国家群とともに林立したが、次第にその中で有力な国家が周囲の小国を併呑して覇権を広げていった。7つという王国の数は、これらの覇権を広げた有力な国を、後世7つの大国に代表させたものである。この王国群の中から後のイングランドが形成され、その領土はアングル人の土地という意味でイングランドと呼ばれることとなる。

と書かれている。

小国家が併存した状況から移住した民族により統一されたという点では、似た状況であったいえる。

## 付録 南北朝の王朝の倭条

### 付録 1. 宋書九十七列傳第五十七夷蠻

倭國在高麗東南大海中 世修貢職 高祖永初二年 詔曰 倭讚萬里修貢  
遠誠宜甄 可賜除授 太祖元嘉二年 讚又遣司馬曹達奉表獻方物 讚死  
弟 珍立 遣使貢獻 自稱使持節 都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸  
軍事 安東大將軍 倭國王 表求除正 詔除安東將軍 倭國王 珍又求除  
正倭隋等十三人平 西 征虜 冠軍 輔國將軍號 詔並聽 二十年 倭國  
王濟遣使奉獻 復以為安東將軍 倭國王 二十八年 加使持節 都督倭  
新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事 安東將軍如故 并除所上二十三  
人軍 郡 濟死 世子興遣使貢獻 世祖大明六年 詔曰：倭王世子興 奕  
世載忠 作藩外海 稟化寧境 恭修貢職 新嗣邊業 宜授爵號 可安東  
將軍 倭國王 興死 弟武立 自稱使持節 都督倭百濟新羅任那加羅秦  
韓慕韓七國諸軍事 安東大將軍 倭國王

順帝昇明二年 遣使上表曰 封國偏遠 作藩于外 自昔祖禰 躬擐甲冑  
跋涉山川 不遑寧處 東征毛人五十五國 西服眾夷六十六國 渡平海北



九十五國 王道融泰 廓土遐畿 累葉朝宗 不愆于歲 臣雖下愚 忝胤先  
緒 驅率所統 歸崇天極 道逕百濟 裝 治船舫 而句驪無道 圖欲見吞  
掠抄邊隸 虔劉不已 每致稽滯 以失良風 雖曰進路 或通或不 臣亡考  
濟實忿寇讎 壅塞天路 控弦百萬 義聲感激 方欲大 舉 奄喪父兄 使  
垂成之功 不獲一簣 居在諒闇 不動兵甲 是以偃息未捷 至今欲練甲  
治兵 申父兄之志 義士虎賁 文武效功 白刃交前 亦所不顧 若以帝  
德覆載 摧此強敵 克靖方難 無替前功 竊自假開府儀同三司 其餘咸  
各假授 以勸忠節 詔除武使持節 都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國  
諸軍事 安東大將軍 倭王

## 付録 2. 南齊書五十八列傳第三十九蠻東南夷

倭國 在帶方東南大海島中 漢末以來 立女王 土俗已見前史 建元元年 進新除使持節 都督倭·新羅·任那·加羅·秦韓·慕韓六國諸軍事 安東大將軍 倭王武號爲鎮東大將軍

### 付錄 3. 梁書五十四列傳第四十八諸夷

倭者 自云太伯之後 俗皆文身 去帶方萬二千餘里 大抵在會稽之東 相去絕遠 從帶方至倭 循海水行 歷韓國 乍東乍南 七千餘里始度一海；海闊千餘里 名瀚海 至一支國；又度一海千餘里 名未盧國 又東南陸行五百里 至伊都國；又東南行百里 至奴國 又東行百里 至不彌國 又南水行二十日 至投馬國 又南水行十日 陸行一月日 至邪馬臺國 卽倭王所居 其官有伊支馬 次曰彌馬獲支 次曰奴往鞮 民種禾稻紵麻 蠶桑織績 有薑 桂 橘 椒 蘇 出黑雉 真珠 青玉 有獸如牛 名山鼠；又有大蛇吞此獸 蛇皮堅不可斫 其上有孔 乍開乍閉 時或有光 射之中 蛇則死矣 物產略與儋耳 朱崖同 地溫暖 風俗不淫 男女皆露紵 富貴者以錦繡雜采爲帽 似中國胡公頭 食飲用籩豆 其死 有棺無槨 封土作冢 人性皆嗜酒 俗不知正歲 多壽考 多至八九十 或至百歲 其俗女多男少 貴者至四五妻 賤者猶兩三妻 婦人無淫妬 無盜竊 少諍訟 若犯法 輕者沒其妻子 重則滅其宗族

漢靈帝光和中 倭國亂 相攻伐歷年 乃共立一女子卑彌呼爲王 彌呼無夫婿 挾鬼道 能惑衆 故國人立之 有男弟佐治國 自爲王 少有見者 以婢 千人自侍 唯使一男子出入傳教令 所處宮室 常有兵守衛 至魏

景初三年 公孫淵誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏以爲親魏王 假金印紫綬  
正始中 卑彌呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺 復立卑彌呼宗女臺  
與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 晉安帝時 有倭王贊 贊死 立弟  
彌；彌死 立子濟；濟死 立子興；興死 立弟武 齊建元中 除武持節  
督倭新羅任那伽羅秦韓慕韓六國諸軍事 鎮東大將軍 高祖卽位 進武  
號征東將軍

#### 付錄 4. 南史七十九列傳第六十九夷貊下

倭國 其先所出及所在 事詳北史 其官有伊支馬 次曰彌馬獲支 次曰奴往鞮 人種禾 稻 紵 麻 蠶桑織績 有姜 桂 橘 椒 蘇 出黑雉 真珠 青玉 有獸如牛名山鼠 又有大蛇吞此獸 蛇皮堅不可斫 其上有孔 乍開乍閉 時或有光 射中而蛇則死矣 物產略與僭耳 朱崖同 地氣溫暖 風俗不淫 男女皆露髻 富貴者以錦繡雜采爲帽 似中國胡公頭 食飲用籩豆 其死有棺無槨 封土作塚 人性皆嗜酒 俗不知正歲 多壽考 或至八九十 或至百歲 其俗女 多男少 貴者至四五妻 賤者猶至兩三妻 婦人不媼妒 無盜竊 少諍訟 若犯法 輕者沒其妻子 重則滅其宗族

晉安帝時 有倭王贊遣使朝貢 及宋武帝永初二年 詔曰： 倭贊遠誠宜甄 可賜除授 文帝元嘉二年 贊又遣司馬曹達奉表獻方物 贊死 弟珍立 遣使貢獻 自稱使持節 都督倭百濟新羅任那秦韓慕韓六國諸軍事 安東大將軍 倭國王 表求除正 詔除安東將軍 倭國王 珍又求除正 倭洧等十三人平西 征 虜 冠軍 輔國將軍等號 詔並聽之 二十年 倭國王濟遣使奉獻 復以爲安東將軍 倭國王 二十八年 加使持節 都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓六國諸軍事 安東將軍如故；並除所上二十三人職 濟死 世子興遣使貢獻 孝武大明六年 詔授興安東將軍 倭國王

興死 弟武立 自稱使持節 都督倭百濟新羅任那加羅秦韓 慕韓七國諸  
軍事 安東大將軍 倭國王 順帝升明二年 遣使上表 言 自昔祖禰 躬  
擐甲冑 跋涉山川 不遑寧處 東征毛人五十五國 西服衆夷六十六國  
陵平 海北九十五國 王道融泰 廓土遐畿 累葉朝宗 不愆於歲 道徑百  
濟 裝飾船舫 而句麗無道 圖欲見吞 臣亡考濟方欲大舉 奄喪父兄 使  
垂成之功 不獲一 簣 今欲練兵申父兄之志 竊自假開府儀同三司 其  
餘鹹各假授 以勸忠節 詔除武使持節 都督倭新羅任那加羅秦韓慕韓  
六國諸軍事 安東大將軍 倭王 齊建 元中 除武持節 都督倭新羅任那  
加羅秦韓慕韓六國諸軍事 鎮東大將軍 梁武帝即位 進武號征東大將  
軍

## 付錄 5. 北史九十四列傳第八十二四夷

倭國 在百濟 新羅東南 水陸三千里 于大海中依山島而居 魏時 譯通中國三十余國 皆稱子 夷人不知里數 但計以日 其國境 東西五月行 南北三月行 各至於海 其地勢 東高西下 居於邪摩堆 則《魏志》所謂邪馬台者也 又云：去樂浪郡境及帶方郡並一萬二千里 在會稽東 與儋耳相近 俗皆文 身 自云太伯之後 計從帶方至倭國 循海水行 歷朝鮮國 乍南乍東 七千餘里 始度一海 又南千餘里 度一海 闊千餘里 名瀚海 至一支國 又度一海千餘 里 名末盧國 又東南陸行五百里 至伊都國 又東南百里 至奴國 又東行百里 至不彌國 又南水行二十日 至投馬國 又南水行十日 陸行一月 至邪馬台 國 即倭王所都

漢光武時 遣使入朝 自稱大夫 安帝時 又遣朝貢 謂之倭奴國 靈帝光和 中 其國亂 遞相攻伐 歷年無主 有女子名卑彌呼 能以鬼道惑衆 國人 共立爲王 無夫 有二男子 給王飲食 通傳言語 其王有宮室 樓觀 城柵 皆持兵守衛 爲法甚嚴 魏景初三年 公孫文懿誅後 卑彌呼始遣使朝貢 魏主假金 印紫綬 正始中 卑彌呼死 更立男王 國中不服 更相誅殺 復立卑彌呼宗女台與爲王 其後復立男王 並受中國爵命 江左 曆晉 宋 齊 梁 朝聘不絕

及陳平 至開皇二十年 倭王姓阿每 字多利思比孤 號阿輩雞彌 遣使  
詣闕 上令所司訪其風俗 使者言倭王以天爲兄 以日爲弟 天明時出聽  
政 跏趺坐 日出便停理務 雲委我弟 文帝曰 此大無義理 於是訓令  
改之 王妻號雞彌 後宮有女六七百人 名太子爲利歌彌多弗利 無城郭  
內官有十二等：一 曰大德 次小德 次大仁 次小仁 次大義 次小義  
次大禮 次小禮 次大智 次小智 次大信 次小信 員無定數 有軍尼一  
百二十人 猶中國牧宰 八十戶置 一伊尼翼 如今里長也 十伊尼翼屬  
一軍尼 其服飾 男子衣裙襦 其袖微小 履如屨形 漆其上 系之腳 人  
庶多跣足 不得用金銀爲飾 故時 衣橫幅 結束相連而無縫 頭亦無冠  
但垂發於兩耳上 至隋 其王始制冠 以錦彩爲之 以金銀鏤花爲飾 婦  
人束發於後 亦衣裙襦 裳皆有襪 拖竹聚以爲梳 編草爲薦 雜皮爲表  
緣以文皮 有弓 矢 刀 槊 弩 矟 斧 漆皮爲甲 骨爲矢鏃 雖有兵 無  
征戰 其王朝會 必陳設儀仗 奏其國樂 戶可十萬 俗 殺人 強盜及奸  
皆死 盜者計贓酬物 無財者 沒身爲奴 自餘 輕重 或流或杖 每訊冤  
獄 不承引者 以木壓膝；或張強弓 以弦鋸其項 或置小石于沸湯中  
令所競者探之 云理曲者即手爛；或置蛇甕中 令取之 云曲者即螫手  
人頗恬靜 罕爭訟 少盜賊 樂有五弦 琴 笛 男女皆黥臂 點面 文身  
沒水捕魚 無文字 唯刻木結繩 敬佛法 於百濟求得佛經 始有文字 知  
卜 筮 尤信巫覡 每至正月一日 必射戲飲酒 其餘節 略與華同 好棋



博 握槊 搏菹之戲 氣候溫暖 草木冬青 土地膏腴 水多陸少 以小環掛鸕鶿項 令人水搏魚 日得百餘頭 俗無盤俎 藉以櫛葉 食用手舖之 性質直 有雅風 女多男少 婚嫁不取同姓 男女相悅者即爲婚 婦入夫家 必先跨火 乃與夫相見 婦人 不淫妒 死者斂以棺槨 親賓就屍歌舞 妻子兄弟以白布制服 貴人三年殯 庶人藹日而瘞 及葬 置屍船上 陸地牽之 或以小輿 有阿蘇山 其石無故火起接天 者 俗以爲異 因行祭禱 有如意寶珠 其色青 大如雞卵 夜則有光 云魚眼睛也 新羅 百濟 皆以倭爲大國 多珍物 並仰之 恆通使往來

大業三年 其王多利思比孤遣朝貢 使者曰 聞海西菩薩天子重興佛法 故遣朝拜 兼沙門數十人來學佛法 國書曰 日出處天子致書日沒處天子 無恙 云云 帝覽不悅 謂鴻臚卿曰 蠻夷書有無禮者 勿復以聞 明年 上遣文林郎裴世清使倭國 度百濟 行至竹島 南望耽羅國 經都斯麻國 迴 在大海中 又東至一支國 又至竹斯國 又東至秦王國 其人同于華夏 以爲夷洲 疑不能明也 又經十余國 達於海岸 自竹斯國以東 皆附庸於倭 倭王遣小德 何輩台從數百人 設儀仗 鳴鼓角來迎 後十日 又遣大禮哥多毗從二百餘騎 郊勞 既至彼都 其王與世清 來貢方物 此後遂絕

## Part IV 目次

序	(Part I の復習)	2
9.	倭の東遷 I (晋書の時代・九州支配・崇神紀-神功紀)	5
	序	
9.1.	任那と加羅	15
9.2.	崇神天皇紀・垂仁天皇紀	26
9.3.	景行天皇紀	36
9.4.	日本武尊	48
9.5.	成務天皇紀・仲哀天皇紀	57
9.6.	神功皇后紀	65
9.7.	考察	85
10.	宋書の時代 (倭の五王)	93
	序	
10.1.	倭王の求めた爵位	95
10.2.	正史(宋書)の記事	102
10.3.	五王の系譜と天皇	119
10.4.	五王と天皇	128
付録	南北朝の王朝の倭条	136
付録 1.	宋書九十七列傳第五十七夷蠻	
付録 2.	南齊書五十八列傳第三十九蠻東南夷	138
付録 3.	梁書五十四列傳第四十八諸夷	139
付録 4.	南史七十九列傳第六十九夷貊下	141
付録 5.	北史九十四列傳第八十二四夷	143